

TRACK 4

There Is A Light That Never Goes Out

To die by your side...

Well, the pleasure - the privilege is mine...

Track.4 There Is A Light That Never Goes Out

大勢の人間が行き交う場所。ここは空港だ。しかし、彼らの多くは肌が白く、髪も金や茶。明らかに欧米人の割合が多い。

そう、ここは日本ではない。フランスーパリーシャルル・ド・ゴール国際空港だ。

「……よりによつて、何でフランスなんだ」

馴染みの茶色の鞆を片手に、青年、赤城周は入国ゲートを出ると深いため息をついた。しかし、彼も内心は非常に心浮き足立っている。外国人の友人は多少なりともいる赤城だが、彼にとつてこれは初めての海外旅行だった。いや、旅行とは少し違う。そもそも赤城はこのような海外に行く予定もなかった。彼にとつて、この冬は就職活動のために色々と準備をする予定だったのだが。

「ちよつと、ここ行つて来て」

まるで近所へお遣いを頼むかのような調子で魔女は彼に言った。赤城自身、初めは気乗りしなかったが、旅費もビザも手配してもらえると言うなら話は別である。きつと良い経験になる。そう肯定的に捉えて彼は日本から出てきた。

— 空気が違う。

赤城がフランスに到着後、一番はじめに抱いた感想がこれだ。空気。というよりは匂いのようなものだろうか。明らかに、日本とは違う異国の雰囲気空港からは漂っていた。赤城は鼻歌を歌いながら出口へと向かう。少しずつ身体の中から空気が入れ替わっていく、そんな気分を彼は感じていた。

「おここれは、これは!!」

突然、赤城の姿を見た男は『英語』で彼に声をかけてきた。

— 英語？

フランスで英語。どこか妙な感じを胸に抱きながら、赤城は声のする方へ振り返った。

「— アンダーソン!! 久しぶりだな!!」

男は赤城の友人だった。アンダーソン・カイル。彼も魔法使いである。E⁹⁹ 事件当時、研究所の襲来を防ぎ、日本で赤城たちと共に戦った数少ない外国人戦闘員の一人であり、事件後は欧州に戻った男である。細身で身長もあまり高くない赤城に対し、アンダーソンはかなりがっしりとした体型。初めての海外に緊張をしていた赤城も、彼の姿を目にして多少の落ち着きを取り戻したようだった。

「三年ぶりじゃないか？まさか君が迎えに来てくれるとは思わなかったよ!!」

「お前が来るのに俺が迎えに行かないわけがないだろう。それにしても……何でフランスなんだ？俺はてつきり英国に派遣されると思っていただけが？」

「ああ……実は……」

陽気に笑いながら問いかけるアンダーソンに対し、赤城は淡々とした表情で返答しようとするが、そんな彼の言葉を遮るように、

「全部知っている。だから俺が迎えに来たんだ」

アンダーソンは豪快に笑いながら、赤城の背中を叩いた。景気づけのようなものだったのだろう。彼の気遣いに、赤城は人知れず小さくため息をついたのだった。

「とにかく。今から軽く一杯でもどうだ？久しぶりの再会だ、色々と話したい事がたくさんあるんだ!!」

アンダーソンが赤城の肩に手を置き、そのまま出口へと向かおうとした瞬間――

「ちよつと？私もいるんだけど!!」

遠ざかっていく二人の背に女の声が響いた。彼らが振り返った先には、一人の女がこちらをじとりと睨んでいた。訳がわからず困惑した表情で赤城を見返すアンダーソン。一方の赤城は、深いため息をついて女の方へと向き直った。

「紹介するよ、アンダーソン。こちらは俺の……」

「妻です。天城遊幽と申します。以後お見知りおきを」

「は……はあ」

赤城の言葉を遮り、とても上品な笑みを浮かべる女、天城遊幽。先ほどの冷ややかな視線

を寄こした人間とは正反対にも思える態度だ。流されるように、彼女と挨拶を交わしたア
ンダーソンは、こっそりと隣の友人へと耳打ちをした。

「つまり……恋人か？」

「ああ……一応は」

「ちよつと、何が一応なの!? はっきり言いなさいよ!!」

男二人は小さな声で会話をしていたが、どうやら彼女の耳にははっきりと届いていたよう
だ。顔を真っ赤にして赤城に詰め寄る遊幽の姿を見て、アンダーソンは彼に同情にも似た
憐れみの視線を向けた。

そして、一通り文句を言い終わったのか、女は一息つくくと再びアンダーソンへと向き直つ
た。

「ところで周ちゃん、何で私だけ紹介されているのよ。彼は誰？」

「ああ、こちらはアンダーソンカイル。あの事件の時、一緒に戦った仲間であり大事な友
人だ」

――【あの事件】。

遊幽はその単語を聞くや否や、大きく目を見開くと静かに口を開いた。

「……何で」

「ん？」

俯く遊幽を赤城は不思議そうに眺めていた。すると突然、彼女は顔を上げ、まるで銃弾のごとき勢いで彼を問いただし始めた。

「何で話してくれなかったの!? 私たち三年前から付き合っていたじゃない!! ううん、それよりもつと前から仲良かったはずでしょ? それなのに……こういう友人がいるなんて知りもしなかった。私たち付き合っているのに……将来も約束したのに……三年前の事件のこと、もつとちゃんと詳しく話してよ」

赤城の胸に顔を埋め、大声で喚き立てる女を見て、アンダーソンは再び憐れみの目を向けた。一方の赤城は、彼女の頭を優しく撫でて笑っている。とても彼らしい対応だ。この赤城周という青年はめったな事でもない限り笑顔を絶やさない好青年である。それ故、このような面倒臭い対応にもきちんと答えてくれるのだ。

「ええと……ほら、あの時俺たち二人とも色々忙しかったじゃない。遊幽は先生に魔法習ってたし、俺は俺で仕事してたし。遊幽が聞いたら俺はいつでも答えるつもりだったよ」

「確かにあの時は忙しかった。それじゃあ仕方なかったかも」

「……それにわざわざ他人に話す様なことでもなかったし」

そう言った後で、赤城は「しまった」と片手で口をつぐんだ。だが時既に遅し。今のは完全に失言であり、予想通り遊幽の顔は再び怒りを露わにしていく。

「……他人。そう、私は周ちゃんの他人だったのね」

「いや、その……他人っていつでも色々意味があつて……」

「じゃあ、どういう意味の他人?」

「えつと……それは」

再び目の前で始まる痴話喧嘩の前に、アンダーソンはそれが終わるのを待つしかなかったのだ。

きま

「ところで、何でまたこんな遠くまで来たの？」

やっと気持ちも落ち着いたところで、遊幽は当然の質問を赤城へと問いかける。しかし当の彼女は彼の返答も聞かずに一人楽しそうに辺りを見回し始めた。

「私、海外旅行なんて初めてなのよね。楽しみだな!!まさか姉さんがこんな風に気を遣ってくれるなんて思いもしなかった!!妹と妹の旦那の分の旅費まで手配してくれるなんて!!」

「旦那って……まだ結婚もしてないの……」

ぼそりと呟くが、どうやら今の赤城の発言は彼女には聞こえなかったようだ。ほっと一息をつくると、赤城はアンダーソンへと向き直った。

「さて、俺もここに来た理由を聞いてないんだ。なんとなく予想はついてるけど、きちんと教えてくれ」

「たぶんその予想で当たっていると思うぞ」

「……何か起きるのか？」

「おそろく……な」

「でも何で俺なんだ？」

「俺の口添えのせいでもあるな。知つての通り、俺たち協会連中の活動領域は欧州全域だ。ただ去年、協会長が変わってアルゼンチン人になっただろ？だから協会本部も南米に移つて、こっちは勢力が弱まっているんだ。それで欧州側の勢力を増強しときたくてな」
「なるほど」

「それにここは前の協会長がいた国だ。拠点にするには色々と設備が残っていて勝手が良い」

説明を聞き終えると、赤城は長いため息をついてうなだれた。

「やつぱり海外旅行気分なんて味わえなさそうだ……」

その瞬間。今までキラキラと目を輝かせていた遊幽が物凄い早さで赤城の言葉に反応した。

「ちよつと!! 私たち、ここに旅行しに来たんじゃないの!？」

「……そのつもりだったけどね」

純粹に海外旅行だと思っていた遊幽は、自嘲気味に笑う恋人を見て、全てを察してしまつたようだ。そしてふらふらと二、三步ほど赤城から遠ざかると、彼女は周囲の目も気にせず大声で宙に向かって叫び声を上げた。

「騙された……また騙された……お姉ちゃあああああん!!」

行き場の怒りにただただ地面を踏み続ける遊幽。そんな彼女をなだめるはずの赤城は傍観を決め込んでいた。仕方がなく、アンダーソンが遊幽へと声をかけようとするが、今度こそ彼女は絶望を顔に浮かべたまま、下を向いてぶつぶつと呟き始めていた。

「あーあ、何だこれ。せつかく二人きりで優雅に海外旅行だつて聞いて色々準備してきたのにさ、まさか仕事で派遣されてるなんて。また働かないといけないの?ていうか、そ

「もそも私たちはいつ……」

「おい……いいのか？彼女」

「今はほつといた方がいいよ」

赤城たちがこそそと話し合っていると、突然、遊幽は彼の右腕を掴んだ。そして今までの鬱々としていた彼女の声色が一気に変わった。

「ねえ。私たち、もう全部辞めて普通に旅行楽しも？ね？」

「え……いや。でも」

急に愛嬌たつぷりとなつた鼻声に、思わず赤城も動揺を隠せずにした。これをチャンスだと思つたのか、遊幽は更に言葉を続ける。

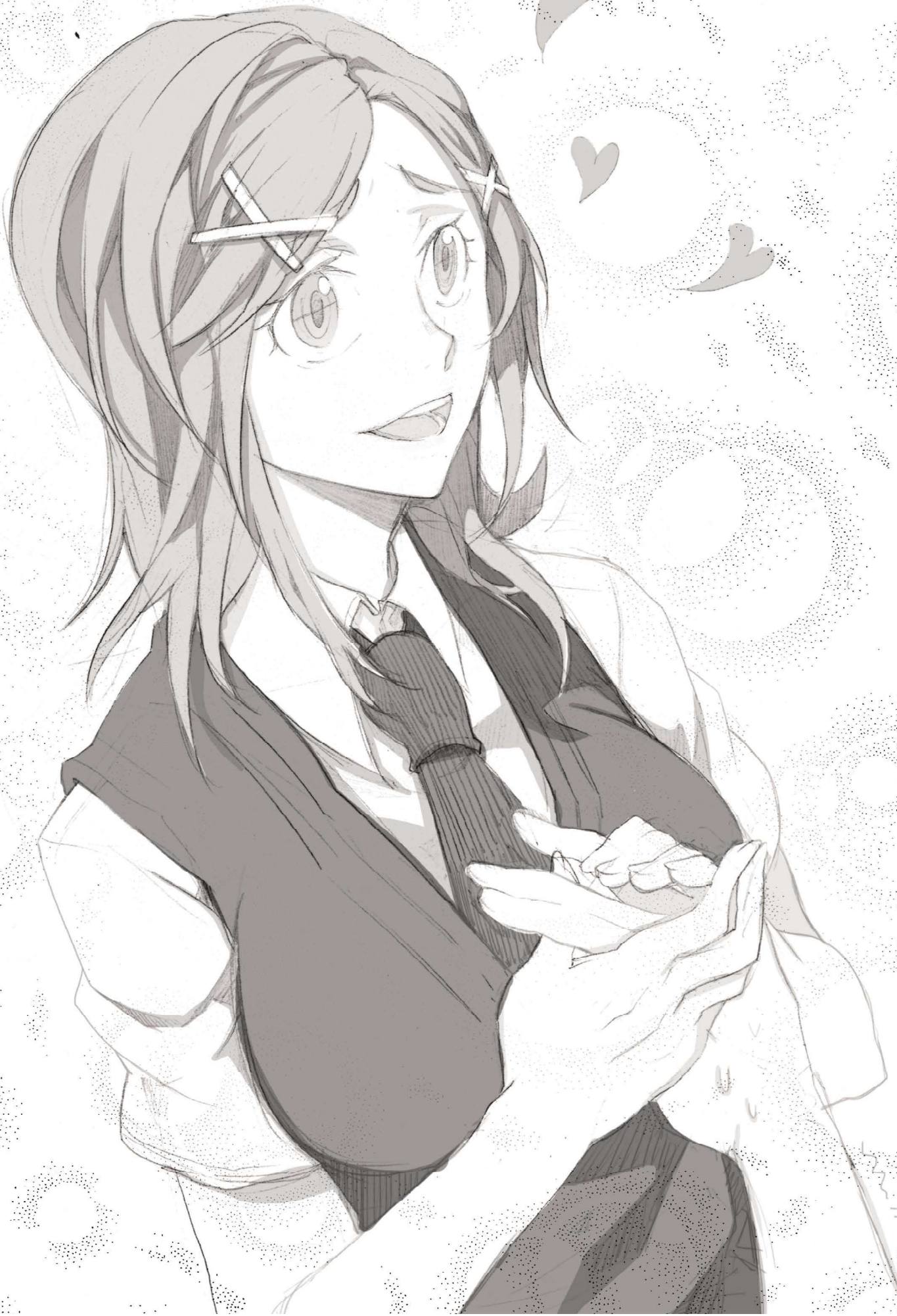
「ねえ、優雅に海外旅行しようよ。とりあえず、何も起きてないんだからいいじゃない。私たちは、綺麗な街並みにおいしい料理に素敵なホテル……姉さんのお金でフランスを満喫しよ？せつかくの初海外だよ？」

両手を握りしめ、甘い鼻声を滑らせながら彼女は徐々に赤城との距離を狭めていく。

「こんな無料で行ける海外予行なんてめつたにないよ？どうせ、姉さんのことだからまた大変な仕事押し付けてきてるだろうし、疲れちゃうじゃない。観光なんてしてる暇無くなるよ。だったら、もう全部忘れて素敵な海外旅行にしようよ」

悪魔の囁きをしばらく黙って聞いていた赤城は、ついに決心したように顔を上げた。そして彼女に笑いかける。

「うん、やっぱ俺には無理だよ。先生が俺たちを信用してくれたからこそ、旅費も全部出してくれたんだ。だから遊幽ちゃん、さっさと仕事終わらせて、旅行楽しもう？」



「……」

「遊幽ちゃん？」

「……………この、気の利かない奴!!」

「痛ッ!!」

「女がここまでアプローチしてるんだから、ちよつとは妥協しなさいよ」

遊幽は思いきり赤城の足を蹴飛ばすと、小言を言いながら足早に出口の方へと歩きはじめた。そんな彼女の背を追いながら、赤城は再び先ほどの話を続ける。

「ところでアンダーソン、研究所の動きはどうなっているんだ？」

「あ……ああ、最新の情報では、Mr.Modification が日本で事件を起こしたと聞いたな。

解決はしたと時宮葵から連絡を受けている。どうやらマエストロが処理したらしい」

「とりあえずは安全か。問題はその次だろうね。研究所の連中が、本格的に動き出したっていう証拠だからな」

赤城の見解にアンダーソンも深く頷き返す。

「……………三年前のような事件がまた起きないといいな」

「組織の半分が飛んだんだ。そんな状況下でできるか？」

疑問符を浮かべる赤城に対し、アンダーソンは鋭い視線で前を見据えたまま静かに呟いた。

「奴らに頭はない。が、たった一人残ったとしても研究所は研究所という【勢力】だ。何を仕出かすか知れない」

「……………そうだな」

瞬間、赤城はいつのまにか自身の顔から笑みが消えていることに気付いた。

「……どうやら随分と重い話をしていたみたいだね」

緊張の糸がほぐれたかのように、ふわりと柔らかい笑みを浮かべる赤城に、アンダーソンも釣られて乗った。

「もつと楽しい話題でもするか？」

「何かネタがあるのか？アンダーソン」

すると、彼は先頭に行く遊幽を見つめたまま、にたりと笑みを浮かべた。

「実は最近、俺にも彼女ができたんだ」

その発言を聞くや否や、赤城は大きな声で笑い始めた。

「はははっ、本当かよ、アンダーソン!! 突拍子もないな!!」

「何がおかしいんだ!!」

「いや、悪い悪い。びっくりして……で、どんな女性なんだ？」

赤城の問いかけに、アンダーソンは急に頬を掻いて恥ずかしそうに視線を横にずらした。

「……少し前に会った女性なんだ。なんかとても落ち着いてさっぱりした女性だ」

「そうか、それは良かったな」

「ああ、いつかお前にも紹介する。お前は両親の次に大事な友人の一人だからな」

そういうと、アンダーソンは財布から一枚の写真を取り出した。そこに映っていたのは本当に美人な女性。ブロンドの髪の毛にブルーの瞳。どこか物憂げな表情が印象的な顔をしていた。

「綺麗な人だな」

「ああ、俺もそう思う」

写真を見つめたまま微笑むアンダーソン。そんな純粋な彼を横目に、ふと、赤城にも悪戯心が芽生えてきた。

「……本当に付き合っているのか？」

「もちろんんだ!!俺は嘘を言わない」

互いに笑い合うと、アンダーソンは密かに彼の耳元へと囁いた。

「これは真面目な話だが、ああいう女性は避けた方がいいぞ?一度目をつけられると中々離してもらえなくなるからな」

おそらく遊幽のことだろう。そう察した赤城は再び前に行く彼女を眺めて、困ったような笑みをアンダーソンに返した。

「わかってるよ。でも既に捕まっちゃったし。それに俺ももう慣れたよ」

「周……」

「大丈夫だよ、無理してないって」

「そうか」

いつも通りの笑みを浮かべる友人に対し、アンダーソンも安心したように、そして激励をするかのように彼の背中を叩いた。

「……そういえば、そんな美人とどこで知り合ったんだ？」

「周、それは飲んでから話そう!!」

豪快に笑いながら、アンダーソンは彼の首に手を回して歩く―しかし、彼らの目の前には警備員に取り押さえられている遊幽の姿があった。どうやら物珍しさ故に、何か迷惑を起こしたのだろう。

「嬢ちゃん、そんな所でもたもたしてると置いてくぞ!!」

「ちよつ……待って!! 助けてよ」

「ほら、早く来ないと、こいつは俺が連れて行っちまうぞ」

「ちよつと!! 誰か助けてよ!! 周ちゃん!!」

アンダーソンは楽しそうに笑いながら、遊幽の横を通り過ぎていく。

一方、赤城の方も面倒事には慣れていているのか、ため息をついて遊幽の元へと戻っていった。

赤城周、天城遊幽、そしてアンダーソン・カイル。この三人にもまた重大な事件が待ち受けていた。それはいずれ彼らの日常にも、そして今後の勢力関係にも大きな影響を与えることになるのであった。

「やっぱりこの店が一番だな」

そう言いながら、アンダーソンは慣れた仕草でカウンターの席へと腰かけた。かなり上品な雰囲気が漂う店内。客の数はまばらであるが、それすらも店のオブジェクトであるかのように静かな空間が出来上がっていた。カウンター越しの店員もあえて客に声を掛けることもない。黙々と自身の作業を行い、あくまでも受け身の姿勢でいるようだ。店内の雰囲気は気後れしつつ、赤城たちもアンダーソンの隣へと腰かけた。

—かなり古い店だな。

店内を見回していた赤城は、ふと、匂いでそれを感じ取った。新しい店内に漂う匂いと、老舗の店内に漂う匂いは明らかに違ふと彼は感じている。これは彼の特技であり、癖のよくなものだった。

「二人は何を飲むんだ？」

座るや否や、真つ先にビールを注文していたアンダーソンは、彼らに声を掛けた。

「ああ……じゃ俺も同じやつを」

ちらりと赤城は、何気なく隣に座る彼女の様子を窺った。明らかに不満げな表情を浮かべている遊幽。しばらく赤城を見据えていた彼女は、諦めたかのようにため息をついてメニュー表に視線をずらした。

「マンハッタンを一つ」

薄暗い照明、店内の雰囲気の様子もあり、彼女は普段より大人びて見えた。しかし、初めての海外旅行。明らかに不安な様子も見て取れる。そんな遊幽の姿に、赤城は思わず笑みを零してしまった。

「……何？」

「ん？」

「何でじろじろ見てるのよ」

「いや、ただ、綺麗だなんて思つて」

「……意味分かんない」

そう言うとな彼女はそっぽを向いてしまった。

初対面の人間からは素っ気ない態度に思われるが、赤城にはわかっていた。これは彼女の照れ隠しのようなものである。彼のガールフレンドある天城遊幽は『好意』を表現する方法が非常に下手なのだ。彼女は幼少期から親の愛情を受けてはいたが、愛情表現を受け取れることは滅多になかった。『愛している』『大好きだ』等の言葉を聞いて成長してこなかった彼女にとつて、それは「言わなくても良い事」のように捉えているのだらう。

現に彼女は初めて会った瞬間から、赤城に迫つていった。一目惚れだったのか、すぐに遊幽は彼に『付き合つてほしい』と告げた。初対面の女性にいきなり交際を求められる機会なんて殆どなかった赤城にとつて、そんな彼女はとても魅力的に映つたのである。

—明らかに他とは違う。におい。雰囲気。

そして四年もの月日が彼らを過ぎて行く。魔女に出会った時も、友人が消えた時も、天城遊幽は彼の隣にいた。

「おい」

アンダーソンの呼び掛けに、やっと赤城は意識を取り戻した。

「周、もう酔つたのか？」

「いや、ちよつと考え事してただけだよ」

「そうか」

訳知り顔でアンダーソンは笑う。赤城もいつも通りの微笑を浮かべた顔を返した。

「さてと……普段なら気持ちよく幹杯するところだが、まずは先に逝っちまった友人にこの酒を捧げよう」

「ああ」

「そうね」

アンダーソンの提案に彼らも頷いた。

そして三人は互いの杯をぶつけず、虚空で杯を交わしてから、それを口に含んだ。

店内に流れる古いポップミュージックのせいか、どこか懐しい心地のまま、しばらく沈黙が続いていた。

「ここはBARなのか？それともPUBか？」

唐突に口を開いた俺の質問に、アンダーソンは豪快に笑いながら答える。

「俺はPUBだと思うな。何故なら俺がビールを飲んでるからだ!!」

「なにそれ」

いつもより上機嫌なアンダーソンに対し、冷静な反応をする遊幽ちゃん。そんな二人の会話に、俺は思わず笑ってしまう。

ふと、呆れた顔をしていた遊幽ちゃんがマンハッタンを一口飲んだ。一口、また一口。彼女がお酒を口にする姿から、何故か俺は目を離せずにいる。

瞬間、俺は顔が熱くなっているのを感じた。すぐにいつもの表情に戻すが、さすが、この気の利く友人にはバレていたようだ。

「奥さんが酒を飲む姿がそんなにいやらしかったのか？」

—直球か。

「いや、そうじゃなくて。綺麗というか、美しく思っただけだよ」

俺が正直にそう答えると、アンダーソンは含みの無い、純粋な笑顔で笑い始めた。

「さつきからどうしたんだ？まるで映画の撮影でもしている気分だ!! 本当にお前は面白いな」

目の前でからかう友人に、俺も少し恥ずかしくなってきた。

「……俺は思った事をそのまま言っただけだ」

「周はロマンチストだな」

「別にロマンチストなんかじゃ……」

「ロマンチストよ!! 美しいとか綺麗だとか普通に言うんだもの」

俺が否定しようとしたところに、思わぬところから援護射撃が来た。そして遊幽ちゃんは楽しそうに笑いながら、再びマンハッタンを口にする。

「おいしい……良い店ですね、行きつけなんですか？」

すつかり店の雰囲気にも馴染んできたのか、遊幽ちゃんは親しげにアンダーソンへと問いかけた。対する、アンダーソンも誇らしげに胸を張って、それに答える。

「ああ!!毎日さ!!ここは酒も安いしな!!」

すると、カウンター越しに立っていたバーテンダーは威圧的な視線を彼に送った。それに気づいたアンダーソンも、思わず頭を小さく下げて愛想笑いを浮かべる。

「ま、まあ今のはちよつとした冗談で……俺が初めてフランスに来た時な、あれこれと苦労が多かったんだが。そんな心さびしい中、偶然この店を見つけたんだ。それ以来、俺はこの店の虜になっちまったってわけだ」

そして彼は、グラスの空いた俺の分も含めてビールを二つ注文した。

「ありがとな」

「いいって、いいって。せつかく友人と再会したんだ!!こんな素敵なお日に飲まないで、いつ飲むって言うんだ!」

「あら、おじさん。あなたも意外とロマンチストなのね」

「おじさん!?お……俺、君とそんなに歳変わらなはずなんだけど!」

アンダーソンと遊幽ちゃんは今、気が合いそうである。俺はそんな二人の掛け合いに、つい声を出して笑ってしまっていた。

—ああ、平和だ。

「ところで……俺たちだけこんなに騒いでいいのか?」

店内に響く自分たちの声が気になった赤城は、そつとアンダーソンへと耳打ちをした。すると、彼は音量などちつとも気にする様子はなく、普段と同じように言葉を返す。

「ああ、平気さ。どうせここは馴染みの客しか来ない。いつも同じやつ顔しか見ないからな」

「それじゃあ、商売的には上手くないんじゃないの？」

二人の会話を聞いていた遊幽が思わず口を挟むと、アンダーソンは付け加えるように答える。

「同じ客でも、毎日来るなら話は別だろ？」

「……なるほど」

「それより、最近どうなんだ？」

二杯目のビールを飲みながら、アンダーソンは赤城たちへと顔を向けた。

「あいつはまだぶつきらぼうな態度なのか？あとマエストロとかその子供は？元気か？」

答えづらい質問が一度に飛び、赤城はひとまず頭の中で整理をした。そして彼も二杯目のビールを口にする、ゆつくりとアンダーソンへ返答する。

「えつと、まずはそのぶつきらぼうな奴、葵ね。あいつは大学生になったよ。著作権騒動以降、協会のバイトをしながら一生懸命学費を稼いでいるみたいだ。マエストロ……先生は、まあ普通に元気だね。それと奏ちやんは」

思わず赤城は押し黙ってしまった。次に紡ぐべき言葉がうまく整理できないようだ。

「奏ちやんは……その……元気であるといいな」

「そうか」

アンダーソンの耳にも先日的一件が耳に届いているはずだ。彼はただ小さく相槌を打った。「完全に解決したわけではないと思うんだ。奴は先生が処理したって報告を受けているから大丈夫だとは思うけど……その背後がな」

「マエストロもついでに、きつと大丈夫だ」

アンダーソンは友人を安心させるかのように満面の笑みで笑うと、豪快にグラスを煽った。そして、彼は思い出したかのように赤城へと振り返る。

「そういえば、隣の彼女は俺たちの仕事について知っているのか？」

「ああ、言っていないかったか？」

そういうと、赤城は少しだけ身を引いてアンダーソンから彼女の顔が見えるようにした。

「遊幽ちゃんは先生の妹だよ」

平然と答える赤城に、アンダーソンは息を飲む。

「なに!? マエストロの妹!? いや、ちよつと待て、マエストロは数百歳も超えてるはずだが……!?」

「体だよ、体」

「あ……ああ、そういうことか」

一人、混乱状態に陥る友人を前に、赤城は簡潔に誤解を解いていった。そして付け加えるように遊幽が身を乗り出して答える。

「マエストロだろうが、先生だろうが、金色の魔女だろうが、私にとっては今も昔もただの私の姉よ」

ふと、彼女の言葉に、赤城はだいぶ前の会話を思い出した。

『魔女としての記憶と習慣、能力。そして天城柴乃としての記憶と習慣、特技。どっちもこの私に宿っている。なら、私は一体誰なのかしらね』

初めて魔女と会った時、彼女が赤城に投げかけた質問。それに答えたのは遊幽だった。

『姉さんの記憶も習慣も癖も特技も全部持っているんですよ？なら、ただの私の姉さんじゃない。大学で博士号まで取って異例の出世ルートに乗っていたのに、突然仕事辞めて教師の資格取った途端、行方不明になった馬鹿な姉さん。妹の顔を忘れたなんて言ったら、承知しませんよ？』

—まっすぐに堂々としていて……変わらないな。

赤城は静かに笑みを零すと、再びグラスに口をつけた。

「それより俺たちの話ばかりじゃなくて、お前の話も聞かせてくれ。ここの奴らはどうなんだ？」

赤城の言う『ここの奴ら』とは教会のことである。アンダーソンもすぐにそれを察し、慎重な声音で語り始めた。

「協会は以前とは違い、一種の企業のように表に顔を出してきたのは知っているな？今までの連中はそれぞれで生計を立てた上での所属だった。まあ一部の裕福な協会員からの寄付もあったが。だが、今回の教会長、アルゼンチン生まれの男が就任して、協会は、より

世間に対して露骨的に存在を示すようになった」

「だいぶ複雑になってきたようだね」

「ああ。俺たちの目標はあくまでも現状維持だ。改革なんかじゃない。だが、俺にはどうもあの男が……いや、教会事態が、均衡を守るといって俺たちの目標を壊していく気がしてならない」

アンダーソンの推察に、赤城も真剣な顔で相槌を打つ。そんな彼の反応を見ると、アンダーソンは更に鋭い視線で前を見据えた。

「おそらく研究所は以前のように、大量の人員を導入して世界規模の行動をすることはできない。奴らが目標を果たすために狙いを定めるのは二カ所だけだ」

「二カ所……?」

アンダーソンは指を出して、カウンターをたたいた。

「一つはパリ、もう一つは」

彼の指は天井を指していた。

「日本。マエストロがいるところだ」

アンダーソンの言葉に、彼らは息を飲む。薄々予想はついていたのか、驚いた様子はないものの赤城はつい疑問を口にした。

「ずっと気になっていたんだが、奴らが日本を狙うのはわかるが、でも、どうしても一つがパリなんだ?今の本部はアルゼンチンだろ」

「ああ、そうだな。でも十五年間も本部が置かれた地だ。数々のお宝が眠っているんだよ」
「宝?」

「……etc.についての資料とかな」

赤城は何も言い返さず、まっすぐとアンダーソンを見据えたまま、彼の言葉の続きを待った。

「アルゼンチンに移せばいいんじゃないかって思っただろ？それができないんだ」

「できない？」

「見つからない、俺たちでも探し出せないんだ」

「それを奴らは探し出したいわけか。けど、おかしくないか？研究所の連中は組織ではないはずだ。同じ所に狙いを定めて一緒に行動するとは考えにくいと思うんだけど」

赤城の質問に対し、アンダーソンは呆れたような表情でため息をついた。

「奴らの本当の目的なんて誰も知らない。いや、俺たちには分かり得ないさ。同じ方向まで一緒に行つて、途中で目的に相違が出たら、まるで分かれ道を進むかのように個人の道を行く。そういう奴らだ。まあ議会だか何だか知らないが、一応形だけでも奴らを束ねている人間がいるみたいだがな。本当に形だけだろ」

赤城も遊幽も黙ってグラスを見つめたまま、静かに彼の意見に聞き入っていた。そんな二人の様子を見て、アンダーソンは気を取り直すように赤城の背中を勢いよく叩く。

「いってえ」

「単なる俺の考えだ!!そんな深刻に捉えないでくれ。そもそもesrについての資料自体、存在するかどうかもわからん代物だ」

背中を抑える赤城に対し、アンダーソンは店内に響き渡るような大声で彼を励ました。そしてもう一杯注文をしようとしたところで、アンダーソンの手が止まった。

ふと、彼は自身の腕時計を確認した。現在の時刻は午後七時三十分。すると、急にアンダーソンは身なりを整え始めた。

「おい、バーテンダー。マンハッタンを二つ頼む」
カウンター越しにちらりと彼へ視線を返すと、バーテンダーは慣れた手つきでグラスを用意し始めた。まるで赤城たちが消えてしまったかのように、アンダーソンは一人そわそわと人を待っている仕草を始める。赤城も遊幽も不思議に思いながら、しばらく彼の行動を見つめていると、

—ちりん

入口に掛けられた鈴が小さく音を鳴らした。

—あ。

店内に入ってきたのは一人の女だった。綺麗なブロンドのロングヘアに茶色のコート、赤いハイヒールが物静かで上品な女性という印象である。

—写真に写っていた女性だ。

口には出さないものの、赤城には一目で彼女がアンダーソンの待ち人なのだとわかった。

「綺麗な人……」

隣に座っている遊幽も思わず感嘆を述べてしまう程、彼女はどこからどう見ても美人だった。

「あ、こんばんは。よく会いますね」

まるで偶然会ったかのように、アンダーソンは彼女に近づいた。対する彼女もにつこりと笑いながら、彼の隣へと腰かけた。

「こんばんは。アンダーソンさん。今日もお元気そうですね」

彼女が席に着くや否や、バーテンダーはとても自然な動きでマンハッタンを二人の前に置いた。

「……本当にいたのか」

「似合わないわね。一種の美女と野獣みたい」

「言われてみれば、そんな風に見えなくもない」

静かな雰囲気で飲み始める二人を横目に、赤城と遊幽は小声で自身の感想を述べ合う。しかし、隣に座るアンダーソンの耳には確実に聞こえていた。若干の戸惑いを顔に浮かべつつも、彼は改めて姿勢を正すと女の方へと向き直った。

「えつと……今日は私にとってとても素晴らしい日なんです。実は昔の友人が訪ねてきてくれて」

「あらそれは本当に素晴らしい日ですね!!」

嬉しそうな笑顔を浮かべる彼女に動揺しながら、アンダーソンは隣に座っていた彼らを紹

介し始めた。

「男の方が赤城周で、この間も話した私の友人です。それと、彼の隣に座っている女性は彼のガールフレンドです」

「こんばんは」

上品な仕草で挨拶をする女性に、思わず赤城も遊幽も慌てた様子で挨拶を返した。そんな彼らが面白かったのか、彼女は小さく笑みを零すと、静かにマンハッタンを口にした。遊幽の時とは違った美しさ。まるで映画や童話に出てくるような、次元の異なる上品さがそこには存在していた。

「あの……」

アンダーソンが再び、頬を掻きながら彼女へと声を掛けた。

「はい」

「いや、その。今日は私の友達をぜひあなたに紹介したかったんです」

「それは光栄なことですね」

「は、はい。今日はとても貴重な日です」

「でも、そんな大事な日に私がここにいてもいいんですか？」

「も、もちろんです!!大丈夫です!!」

先ほどまでの彼女の笑顔が、突然申し訳なさそうな表情になった途端、アンダーソンはいきなり顔を上げ、大声で彼女へと振り返った。

「……ずっと思ってたけど、あの人馬鹿ね」

「俺はまっすぐでいいと思うよ」

くすくすと隣で囁き合う赤城たち。それでも赤城は、女性に対してどのような接していいかわからない友人を見るのは楽しかった。馬鹿にしているわけではなく、それは本当に、純粹に、友人が幸せそうに見えたからだ。景氣の良い音を立てて、幹杯を交わした後、女は思い出したかのように赤城たちへと向き直る。

「ごめんなさい、自己紹介を忘れていたわ。ルイス・マクドゥーガルです。よろしくお願
いします」

アンダーソンの言葉によると、初めて彼女に出会ったのは六ヶ月前のことだった。彼自身、三年前からこの店には通い詰めていたが、ある時彼女を見かけてから、アンダーソンはわざわざ彼女と同じ時間帯に飲むようになったという。その後、彼らはどちらも一人で飲みに来る客だったため、すぐに打ち解けたのだ。

幸せそうな空気を醸し出す彼らに、赤城は妙な居心地の悪さを感じ、離れた席に移動しようとしたが、アンダーソンの逞しい手が赤城の腕を掴んでいた。

「どこ行くんだ？」

「あ……いや、なんか俺たち邪魔かなと思って」

「何言ってるんだ、俺が招待したのに邪魔なんて思うわけがないだろ」

ルイスには聞こえないくらいの小声での会話。彼の気遣いに、赤城は再び自身の席へと深く腰掛けたのだった。すると、今度は赤城の服の裾を何か引つ張った。

「どうした？」

不思議に思つて顔を上げると、彼の隣に座る遊幽は気まずそうに顔を伏せている。

「なんか……私たち招かれざる客になつちやつたんじゃない？」

どうやら彼女も赤城と同じ気持ちだつたらしい。数分のズレがある辺り、やはり赤城の方が空気は読むのが得意なようだ。

赤城は遊幽を安心させるように優しい笑みを浮かべると、

「大丈夫だよ。というか、むしろアンダーソンは俺たちに居てほしいんだと」

「そ、そう」

「俺たちは俺たちなりに楽しもう。お金も充分あるし」

すると彼女は、少しまりが悪そうな表情をすると、気を取り直したかのようにグラスを注文した。

マティーニだ。

「……何でそんなに酒に詳しいんだ」

「乙女の嗜みよ」

気取った様子でグラスを傾ける遊幽。

「まあ、知ってるカクテルは最初のやつとこれだけなんだけどあつさりとは本音を告げてしまう彼女に、赤城は小さく笑みを零す。

「遊幽ちゃんにそんな酒は似合わないもんね」

「……どういう意味？」

「い、いや。何でもない」

思わず地雷を踏んでしまった赤城は、何事もなかったかのようにビールを呷った。隣には不機嫌な恋人。

反対側には現在進行形で恋に奮闘する友人。行き場のない彼の視線は、ただ呆然と前を見ていたのだった。

—この後は予約しておいたホテルに戻って、仕事は明日からだな。

ぼうつと今後の予定を考えていると、ふと、隣の会話が赤城の耳に入ってきた。

「あの……音楽とか、好きですか？」

—ありきたりな質問だな。

「はい。大好きです」

—それでも答えてくれるのか。良い人だな。

「年に似合わないですけど、ロックンロールとか、好きで」

「あら、私も好きです。年に似合わないなんて言わないでください。音楽に年は関係ない

ですよ」

ぎこちない会話でも、ルイスは楽しそうに笑っている。

—まるで教科書じみている。

本当によく出来た女性のようにだ。

—作為的にも思える。

二人の会話は上手く発展することなく、そこで終わってしまった。

「……俺も混ぜてもらっていいかな？」

赤城は友人のヘルプを察知し、二人の対話に割り込んでいった。いや、彼自身、隣の彼女からの視線に耐えられなかったのかもしれない。

「周、遠慮しないでいいぞ。好きなもの頼んでくれ」

アンダーソンの顔からは感謝してもしきれないと顔に出ていた。どうやら彼の応援をアンダーソンは待ち望んでいたようだ。

「じゃあ遠慮なく……どれにしようかな」

赤城がメニュー表を眺めている横で、遊幽がことりとグラスを置いた。どことなく彼女が飲んでいるものがどんな味なのか興味を沸かした赤城は、

「すみません、マティーニを一つ」

しばらくして、赤城の前にグラスが置かれた。水のように透明な液体の底にはオリーブが一つ。

バーテンダーの力量が試されるというカクテルの中の王様、マティーニ。

「その様子だと、マティーニは初めてか？」

「ああ」

初めてのお酒に高まる緊張感。赤城はゆつくりとグラスを手にした。そして一口。

「味がない」

静かに揺れる水面を見ながら、赤城はぼつりと感想を漏らした。

「ははは!! 周にはまだ早かったか!!」

赤城以外の三人が微笑ましそうに笑う。不機嫌そうな顔で二口目を含み、彼はグラスを置いた。

「遊幽ちゃんはこんな酒を飲んでいたのか。」

「ところでルイスさん、何の仕事をしているんですか？」

赤城は場を取り直すように、基本的な質問から入ることにした。

「ああ、彼女は近くの図書館で司書をしているんだ」

ルイスに訊ねたはずの質問を、何故かアンダーソンが誇らしげに答えた。若干、顔を引きつらせた赤城だが、

「へえ……司書さんなんだ」

遊幽の素直な感嘆に、彼も会話に集中した。

「すごい似合いそうな職業ですね」

「そうですね？ありがとうございます。でもそんな大それたものじゃないですよ。アンダーソンさんの方が大きな職場で大変そうですね」

「い、いえ、そんな……」

上品そうな笑みでアンダーソンに顔を向けるルイス。一方の彼は、顔を真っ赤にして頬を掻いていた。

「また大きな仕事が無い込んだらしいですね」

「いや、そこまで大変な件でもないんで大丈夫ですよ。ただ古文書を調べるだけですから……そうですね。それなら良かったです」

安心した様子を見せた彼女は、ふと、時計に目をやった。

「あら、もうこんな時間。ごめんなさい、私そろそろ帰らないと」

「あ、じゃあ外でタクシー拾いますよ」

帰り支度を始めたルイスに付き添う形で、アンダーソンもコートに腕を通した。

「じゃあ、先に外に出ているぞ」

「では、お先に失礼します。今日はお話しできて本当に嬉しかったです」
赤城たちに向かつて小さくお辞儀をすると、彼女は店主にお会計をお願いした。二人はそれぞれ別々の小切手にサインをする。
そして、出口に向かう二人の背を見送ると、赤城は不思議そうに彼女の残していった小切手を眺めた。

「Luise McDougall】……こんなスペリングなのか」

赤城たちがグラスに残った酒を飲みきってから外に出ると、既にルイスはいなかった。壁に背を預けて遠くを見つめるアンダーソンただ一人。おそらく彼女はそっち方面に帰ったのだろう。

「写真のイメージ通りだった」

赤城の率直な感想にアンダーソンは笑った。

「今まで会った中で一番綺麗な女性だと思う」

「へえ……そう？」

「あ、いや……その」

遊幽の鋭い視線にたじろぐ赤城。そんな彼らを静かに見守っていたアンダーソンは、しばらくしてやっと話を切り出した。

「それじゃあ、今日はこれでお開きにするか。仕事は明日からだな。内容も明日説明してやる」

「ああ。そうだな。じゃあ明日」

「お前ら、宿の場所はわかるのか？」

「ここから近いところだよ」

「そうか。じゃあ気をつけて帰れよ」

アンダーソンの大きな背中を見送り、二人は帰路についた。

「ねえ、周ちゃん、ホテルはどんな所なの？」

アルコールのせいもあり、少し火照った顔の遊幽が赤城へと訊ねた。旅行の醍醐味の一つでもあるホテル。彼女もそれなりに期待しているのだろう。

「着けばわかるよ」

「それはそうだけど。綺麗なところだといいな」

「……先生が高い所とってくれたらしいから、綺麗だとは思うけど」

「本当に!？」

嬉しそうに顔を輝かせる遊幽とは正反対に、赤城はどこか不安気な表情を浮かべていた。

堅実強固な入口、深紅のカーペット、豪華な特大シャンデリア。ここが城だと言われたら、百人中百人が頷くであろう、そんなホテルだった。あまりにも場違いな雰囲気、赤城は思わず入口で立ち尽くしてしまった。

一方の遊幽は、そんな彼の心情を知ってか知らずか、まるでお城の観光をしているかのよう感嘆の声を上げて中に入っていく。

「わあ、すごいね!! 私こんなホテル初めて来たよ、すごい豪華!!」

「う、うん。俺も初めてだよ」

さつさとチェツクインを済ませて部屋で落ち着こう、そう思っただけは足早にカウンターへと向かった

しかし、ロビーが豪華なら部屋も豪華。それは当たり前だった。いや、赤城が落ち着かないのはもう一点。彼らが案内された部屋にはベッドが一つしかなかったのだ。

「……確かにこつちの方が割安なのはわかるけど。先生は心配じゃないのか？」

水音が聞こえる浴室にちらりと視線を投げると、赤城はいそいそと洗面道具を準備した。

「ところでさ、周ちゃん」

浴室からの呼び掛けに一瞬びくりとした赤城だが、先にシャワーを浴びている彼女はそんな様子を知りもせず続ける。

「私たち、いつまでここに滞在するの？」

当然といえば当然の質問だが、赤城も何泊かは知らされていなかった。そもそも突然の海外出張に、そこまで回す気がなかったのだ。

「俺も聞いてないけど……まあ、仕事が終わるまでじゃないかな」

「……それはつまり、仕事が終わるまで家に帰れないってことね。ブラックすぎる」

「一応、良待遇なんだからグレーだよ」

ははは、と乾いた笑い声を洩らす赤城に遊幽は一呼吸置いて再び声を掛ける。

「そういえば、さつきの女の人さ」

「ルイス・マクドゥーガルさん？」

「うん」

「あの人がどうかしたか？」

「いや、ううん。別に」

彼女にしては何とも煮え切らない返答だった。

「何か気になるのか？」

「……綺麗な人だったね」

「うん、俺もそう思うよ」

「でも、なんかー、完璧すぎない？」

彼女の疑問に赤城は無言で返した。それを肯定と捉えたのか、

「なんか、映画に出てくるような人だったから……驚いて」

「俺も同じこと思った」

「やつぱり？」

「うん」

互いに返す言葉が見つからず、浴室の水音だけが響く室内。ふと、赤城はアンダーソンの顔を思い浮かべた。恋に溺れて周りが見えていない。目がハートになつていたと言っても過言ではない。しかし、彼はアンダーソンを否定したいわけでも、ルイスを否定したいわけでもなかった。

ただただ友人の幸せを願っているだけなのだ。

「周ちゃん、私出たから次入っていいよー」

突然、浴室の扉が開いた。

「な……ちゃんと服着てくれ……」

今更どうしたの？という顔で髪を拭きあげる遊幽。彼女の身体はバスタオル一枚で覆われているだけだった。そして、赤城が見ているかどうかも構わず平然とした顔で下着に手を伸ばす。

結局、白旗を上げたのは赤城だった。彼は逃げるように浴室へと移動するが、

「なんと……!?」

浴室内には洗いたてのシャンプーの匂いが充満していた。

「……いかん、いかん」

込み上げてくる妙な感情も、まるごと洗い流すかのように、彼はそそくさと服を脱ぎ始めた。

暖かいお湯が身体を包み込む。それだけで赤城の身体は、やつと自身の疲労を認識した。狭い機内での長時間フライト。いくら寝れたとしても、満足な睡眠には至らなかったのだ。

―きつと遊幽ちゃんも疲れているだろうな。

しかし。赤城がシャワーを終え、浴室を出ると、

「……あれ？」

とつくにベッドの中で寝息を立てているだろうと予想していた彼女は、今、赤城の前に立ちふさがるように立っていた。

「えつと……その格好は？」

「勝負下着」

「なるほど」

「全然動揺しないのね」

もうこのような状況には慣れているのか、赤城は一瞬驚いたもののすぐにいつもの顔に戻っていた。そんな態度が気に入らなかつたのだろう。遊幽は風呂上がりで完全に油断していた彼の腕を引っ張った。

「うわ」

不意打ち。重力に逆らうこともできず、赤城の身体は仰向けのままベッドに倒れこんだ。そして、押さえつけるように遊幽が彼の上に跨る。

「何その顔。まさか同じベッドで寝るのに、何も起こらないと思った？」

「そういえば勝負下着だったね」

「そう、勝負下着」

徐々に近づく彼女の身体は、以前のものよりも成長していた。そんなことを頭の隅で思いながら、赤城は身体を起こそうとするが、

「……一緒に寝るのも久しぶりなんだから、いいでしょ？」

遊幽は甘え声と共に、男の胸に顔を沈めた。

「起き上がれない」

「当たり前でしょ。押し倒してるんだから。私が何のためにこんな格好していると思ってるの？」

互いに、触れ合う肌の温もりは、先ほどのシャワーのものよりも身に染みて感じていた。

いざ男女の夜が始まるとういう時、

「あははは、まさか遊幽ちゃんに押し倒されるとは思ってた」
場違いな笑い声が部屋に響いた。瞬間、遊幽の顔は女の顔から真顔へと戻る。

「何がおかしいの」

「ああ、いや、ごめん」

唇が触れ合う距離で見つめ合う二人だが、ふと彼女は視線を落とした。

「……私とするのは嫌？」

彼女の声には挑発も誘いもない、純粹に悲しい色が含まれていた。

「そんなことない。嫌じゃない」

「そう」

そしてその声と共に、彼女の笑顔は少しずつ変わっていく。それはまるで、獲物を捉えたかのような顔。

「今夜は寝かせてあげない」

「……それは男の台詞じゃないか」

男の言葉を最後に、彼らの唇は重なる。長い夜が始まる合図だった。

「よつ、周。こんな豪華なところに泊りやがって羨ましいな。昨日はよく寝れたか？」

翌日、アンダーソンは陽気な笑顔で友人を迎えにいった。

「あ…ああ」

深い隈の出来た顔で返事をする友人に対し、

「あら、アンダーソンさん。良い朝ですね」

キラキラと輝く笑顔の彼女。とても生気があふれていた。対照的過ぎる二人を見て、アンダーソンはそつと赤城に訊ねる。

「な、何かあったのか？」

「友よ、女性は本当に怖い生き物だ…」

力なく答える彼を見て、アンダーソンはすぐにそれを察してしまった。そして何も言わずに彼は赤城の肩に手を置く。

朝食を終えた彼らは、アンダーソンの運転で郊外へと向かった。三十分程度で辿りついたそこには、中世の面影を残したかなり古い建物が一つ。

「素敵…：アンダーソンさん、こんなところで働いているんですか？」

「ああ、良いところだ。俺も気に入っているんだ」

先日まではここが本部だったんだ、と小さくアンダーソンは続ける。その横顔はどこか郷愁にかられていた。

「入るぞ。まずは事務室に案内する」

三階ほどの高さのある長い階段を登り、彼らは建物の隅にある小さな入口から中へと入った。

きま

「表向きは古文書研究と建設業ね……」
事務室に入り、まず目に入ったのが机の上に散らばった資料だ。赤城は数枚を手にとると、呆れたような顔でため息を漏らした。

「建設業の方はあながち間違っではないぞ。本部を建てたのも俺たち自身だからな。古文書も、まあ間違ってなくはないが……」
アンダーソンがなんとか弁護しようとするが、どうも歯切れが悪い。

「それで、俺たちの仕事内容は何なんだ？」

赤城の質問にアンダーソンは無言で、引き出しから封筒を取り出した。

「これは？」

「いいから開けてみる」

彼は隣にいる遊幽と一度顔を見合わせ、ゆつくりと紐を解いていった。中に入っていた書類を丁寧に読み進めていく。特に目新しいことは書いておらず、現在の状況や今後の見通し、この程度の内容だった。しかし、あるページで赤城の顔つきが変わる。

「そうか、だからフランスまで送ったのか」

一人、納得気な表情に至る赤城。その言葉を聞いた遊幽も、彼の手元から書類を奪うと声

に出して読み始めた。

「欧州地域で謎の神隠し事件発生。奇跡的にも発見された人間は、自身の身体の一部を認識できず、何度も『無い、無い』と言いながら苦痛を訴え、ひどいケースではショック死に至る……これって」

「ああ、普通では有り得ないね」

不安気な表情を浮かべる彼女に対し、赤城も頷く。そしてアンダーソンへと顔を戻した。

「おそらく空間の魔法を利用した奴らの実験である可能性が高い。仮に違つたとしても、こういう事件はこちらで預かる内容だ」

「……どうして研究所の犯行だと思われてるんだ？協会内部の極端な思想を持つてる奴らの実験かもしれないだろ？それに空間の魔法じゃなくても、文章を利用した強力な催眠の可能性もある」

「まあ、な」

赤城の疑問に肯定も否定もできないのだろう、アンダーソンは腕を組んだまま正面を向いていた。彼も現状では何とも言えないのだと判断した赤城は、

「要するに、事件の一部始終を見守る人間が必要なのか」

「そうだ、お前の能力なら数日は潜伏することが可能だろう」

赤城の空間創造能力。確かにこれは潜伏任務に向いている。以前は外界の認知は不可能だったが、今では音も視界も捉える事が可能になっている。しかし、それに伴い消費する体力も増えていた。

「はあ……また厄介な仕事だな」

「わかりやすくもいいじゃない。要は犯人を捕まえればいいんでしょ？」

後に控える疲労を思い、落胆する赤城に対し、遊幽はすっきりとした顔で言葉をまとめる。

「つまりは、そういうことだな。周、次のページ見てくれ」

「ん？ああ」

アンダーソンに促され、赤城は再びページをめくった。

「これ……」

「今まで行方不明になった人間は全て協会の関係者だ。お偉いさんから、末端のやつまで。そして被害者たちの特徴は、」

「古文書を扱う人間、か」

一呼吸置いた彼の代わりを赤城が続ける。

「なるほど、だから研究所の犯行だと疑っているわけか」

「ああ」

「……ちなみに協会内の権力争いとかの線は？」

アンダーソンは静かに首を振る。

「その問題は既に終わった。そこまで対立もしていなかったし、そもそも本部が移った今、欧州で事件を起こす理由がわからない」

それもそうか、と納得する赤城。一方のアンダーソンは、説明を終えるとじつと窓の外を眺めていた。そして、淡々とした口調でぼつりと漏らす。

「古文書の研究者だけじゃなく収集する人間にも目を向けられたら、その内俺も狙われるんだらうな」

そんな友人の様子に目を向けることなく、赤城は思案にふける。

―何で古文書を扱う人間なんだ……？

ふと、彼は先日の会話を思い出す。そして確かな結論に至った。

「etcか」

赤城の呟きを、アンダーソンも静かに肯定する。

「ああ、奴らはeggの古文書を狙っている。奴らはそれが存在していると信じているんだ」

赤城周の能力【空間創造】、これを使えば潜伏など容易いものだ。空間を生成し、その中でじつと外を見てさえいれればいい。もちろん外部からは見えないようにできているので、存在が露呈することもない。そして、空間の内部も自身で大きさから湿度に至るまで設定できる。

使い勝手の良さそうな能力だと思いかもしれないが、彼自身はこの能力は役立たずだと思っている。野宿をする際のテント代わりになる位にしか思い浮かばない。それでも空間内は天候の影響を受けてしまい、完全なテント代わりとも言えないだろう。

とにかく、赤城周はフランスに来てようやく仕事を開始した。事件が起きるのは週に一度。先週の事件から今日がちょうど一週間目。事が起きるのは今日しかないのだ。

彼の仕事は午後九時から夜中の三時までの間、見晴らしの良い建物の屋根の上に陣取り、眼下の入口を見張る。そこはアンダーソンを初め、多くの協会の役員が出入りするところだ。今回の事件のターゲットは古文書を扱う一般人が殆どである。魔法を知っている者もいれば、魔法など関係なしに美的価値、文学的価値を求める本来に普通の一般人もいる。彼らを守るため―というのが今回、赤城を動かす主な理由だろう。

「はあ……」

アンダーソン曰く、昼間は人通りが多く、能力を使用しての犯罪をするような連中は決まって夜に事件を起こすのが定石だという。彼の理論にはいまいち納得できず、赤城は思わぬため息を零してしまった。

「どうしたの？ ため息なんてついたら幸運が逃げちゃうよ」

彼の背後で、この状況に不釣り合いな明るい声が出た。

「いや、何でもない」

遊幽の姿をちらりと横目で捉えると、再び彼は顔を戻した。

「遊幽ちゃん、外すごい寒いけど大丈夫？」

「大丈夫よ、私はそんな柔な身体してないもの」

「そっか……いや、でも色々不便になるよ」

「そりゃあ、不便だけど私は大丈夫。何で一緒に来ているのに別行動しなきゃいけないの、私も手伝うわよ」

本来なら、この任務は赤城一人で行うはずだった。いや、行いたかつたのだ。しかし、それは彼の願いに留まつてしまった。どんなに断ろうともこの有様である。

「……トイレも自由にいけないけど」

「む……なんとかなるでしょ」

「ならないかもしれないよ」

ついに彼女もきまりが悪くなったのか、必死に追い返そうとする赤城に向かって大きな声を上げた。

「私がそばにいたら嫌なの!? 邪魔ってこと!?!」

「そんなことはないよ」

―だめだ、俺の負けだ。

赤城は心の中でそつと呟いた。そして遊幽に振り返って再度確認をする。

「本当に不便な生活になるよ」

「平気よ!! 子供じゃないんだから我慢できるわ」

―中身はまだまだ子供じゃないか。

誇らしげに胸を張る遊幽に呆れた顔を返すと、赤城は任務へと戻った。

しかし、彼は遊幽の介入を拒んでいたが、実際彼女の能力は今回の任務で非常に効果的なものであった。天城遊幽。金色の魔女を姉に持つ彼女は、自身に戦闘向きの魔法の素質はないと早々に理解していた。そこで彼女が選んだのは、「探索」という道だ。

魔法というものは、文章を書き、自身がその意味を理解し具現化すること。故に必要な要素は、その文章に関する「完全な理解」だ。カメラや盗聴器など、その構造・仕組みまでも理解した上で魔法を用いなければ具現化することはできないのである。そしてこの魔法を応用すると、彼女は相手の位置を感知できることができる。追跡も可能だが、赤城と遊幽の場合は敵と交戦する戦闘スタイルは合わない。一度敵を捉えたが最後、追うか追われるかのレースで相手を疲弊させることが目的だ。

さま

どれくらい時間が経ったのか、赤城がふと、腕時計を見ると監視を開始してから五時間近くも経っていた。何も起こらず、ただじつと入口を見張り続けるのも辛くなってくる頃合いだ。隣に座る彼女は先ほどからウトウトと首を上下に動かしている。

「寝ている時はこんなに可愛いのに……」

隙だらけなその姿に小さく笑みを零す赤城。そして再び双眼鏡を手取る。

パリで事件が起こるのは明らかだった。本部があつたからというのも大きな要因だが、それ以上に彼らの犯行経路が東から西に動いていたからだ。ロシアを皮切りに、オーストリア、チェコ、ドイツ……ならば次はフランスだろう。

「研究所はあくまで個人主義の組織……何か変な感じがするんだけどな」
ぼんやりと考え事をしていた赤城は、突然被りを振った。

「だめだ。集中しないと」

今はそんな事を考えるより目の前の監視が最優先だ。そう思うと、赤城は先ほど以上に目を光らせて入口を見張り続けた。

「おっ」

やつと人の出入りがあつた。おそらく夜勤を終えた人達だろう。アンダーソンから渡されたりリストと彼らの顔を照合するが、どうやら彼らはリストには入っていないかつた。

「このまま何も起こらないのが一番だな」

ふと、赤城は視界の隅で何か動くのを捉えた。

―あそこは裏通りか？

パリ内部でも裏通りの人通りは結構ある。先ほどからも、ちらちらと動く影を見ていた。しかし、今のは何か奇妙な動きだった。

赤城がもう少し様子を窺おうとした瞬間、一気に仕事を終えた人達が入口から溢れ出てきた。最悪のタイミングである。赤城は急いで、入口の方に目を移した。もちろん全員が同じ方向に帰るわけではなく、それぞれが別の方向に分かれて行く。赤城はリストに載っている古文書関係の学者を探し、彼らの様子を変わり変わりに確認していった。

―その時だった。

「うわああああ!!!」

赤城が注視していた所とは別の所から声が上がった。一人の男が苦しそうな様子で地面に倒れ伏している。そして一人、また一人、同じように悲鳴を上げて倒れて行く。

「銃声は聞こえなかった。怪我もしていない」

双眼鏡をのぞき、冷静に被害者の状態を確認していく赤城。

「遊幽ちゃん、起きて!!」

「うえっ!? な、何かあったの!？」

言うや否や、赤城は彼女の身体を抱え、すぐさま下に向かう。勢いよく階段を駆け下りて外に出ると、三人の男が道路に倒れていた。

「大丈夫ですか!？」

赤城は遊幽を降ろし、急いで被害者に駆け寄ると、彼らは決まって同じようなことを呟く。

「あ、足が……!!」

「助けてくれ!! お、俺の腕が!!」

見たところ外傷は一つもなく、至って異常は見られないが、彼らは激痛を訴え続けている。書類に書かれていた通りの事件が赤城の目の前で起こっていたのだ。

「くそっ……どうすればいいんだ」

—ポーンツ

「何だ!？」

赤城は思わず音のした方を振り返る。すると、先ほどまで自分たちがいた場所に黄色い炎が二つ、闇の中で揺らめいていた。

「二人いるのか……!？」

咄嗟に赤城は懐に忍ばせた拳銃に手を掛ける。仮に戦闘になった場合、彼が応戦する手段はこれしかないのだ。頭上の人影をじっと見つめて警戒を続ける。

「周ちゃん!!」

「来ちゃだめだ、そこにいる!!」

遊幽が赤城の近くに行こうとした瞬間、頭上の影が動いた。その陰は彼と重なり、
「うっ……ぐ」

赤城の左腕にとてつもない激痛が訪れた。まるで骨折でもしたかのようだ。

——しまった、俺もやられたのか!?

しかし、彼の腕には傷一つついていない。おまけに動かすこともできるようだ。赤城は激痛を堪え、右手の拳銃を構えた。

銃声が深夜の街に響く。そろりと巨大な影は身を引いた。

「遊幽ちゃん大丈夫!?!」

赤城の怒鳴り声に驚いた彼女は、階段のところから一步も動かずにじっとしていた。

「私は、大丈夫だけど」

「じゃあ、ここを起点に半径二十メートル以内、協会の人達を除いた他の人間の動きをチエックするんだ」

「わかった」

遊幽は彼に頷き返すと、服の中から取り出した紙を地面に張り付け手をかざした。すると、

綺麗な青い光が紙から漏れだし、

「左に一人、十メートル前方にもう一人!!」

「合計二人か……了解、警察が駆けつける前に終わらせないと」

赤城の武器は拳銃のみ。さすがに勝てる見込みはなかった。瞬間、敵の一人が被害者たちに向かつて動き出した。赤城は咄嗟に引き金を引くが、相手はすぐに身を反らして軽々と銃弾を躲す。

「くそつ、ならもつと距離を詰めて……!!」

赤城も拳銃を構えたまま、敵に向かつて突っ込むが、

「―なっ!?!」

突然、赤城の後ろから何か近づいてきた。そして彼が充分に驚く間もなく、それは「赤城周」という存在を含んだまま空間を創造した。

「ど……どういことだ」

次に彼が目を開けた時、そこには真っ白な空間が広がっていた。赤城以外に被害者の三人、そして黒い影が立っている。そう、それは人間の形をした黒い物体だった。

「お前は何だ」

徐々に近づく影に赤城は拳銃を構える。残弾は残り二発。ゆっくり近づいてくるそれに、赤城は慎重に照準を合わせて引き金を引いた。

衝撃と共に、先ほどの激痛が彼の腕を駆け巡る。そして、真っ白な空間に二発の銃声が響いた。弾丸は確実に黒い影を貫いていた。しかし、影は一向に止まることなく赤城に迫っていく。

「改造人間か」

このような改造人間は初めて見たのか、赤城は動揺を隠せずにいた。

「くそっ」

じりじりと迫りくる影に、後ずさる赤城。だが銃弾を使いきってしまった以上、対抗する手段はもうなかった。左腕の激痛も続いている。

「ごめん、遊幽ちゃん。これはもう無理そうかな」

苦笑いを浮かべる赤城。彼はこの場にいない恋人に謝ると、そっと目を閉じて影の到来を待つことにした。

一步、一步、静かに近づく死。

赤城周にも恐怖という感情はある。冷たい汗が頬を流れ下に落ちる、まさにその時だった。

「減点だらけだ」

風が通り抜けるかのように、赤城の横をしわがれた男の声が過ぎて行った。思わず、目を開けると、彼の目の前には中年の男が立っていた。ソフト帽に黒いコート、そして右手には拳銃。

「拳銃を撃つ時は消音機を忘れずに」

そう言うと、彼は赤城に向かって拳銃を投げた。そして影に向かって突進する。

「全くこのような改造人間……非常識にも程がある」

敵の手前で男は懐から小さな紙を取り出し、床に張り付けた。瞬間、青い光が一带を包み、黒い影は動きを止める。

「自身の能力を使いこなしていないな、赤城周くん」

「あなたはー、ブリーゲルさん!!」

驚いた表情を返す赤城に対し、男は落ち着いた声で赤城を評価した。

「やはり潜伏能力だけでは駄目だな、その後の対処も考えねば再びこのような状況に」

「それより遊幽ちゃんが!!外にもう一人いるんです!!」

「まずは目の前の敵だ!!君は彼女を信じられないのか!!」

話を遮られたせいにか、普段より大きな声を上げるハンス・ブリーゲルに、赤城もつい押し黙る。そして、彼も黒い影へと目を戻した。

「あの紙の効果もそろそろ終わる。その前に君が何とかしなさい」

「何とかって言われても……」

「私が来た以上、もう解いても平気だろう」

「解く……?そうか!!」

創造された空間。創造する能力。赤城と同じような能力なのだとしたら、彼にも敵と同じ事ができるかもしれない。

「あははっ。動揺しちゃうと、自身の能力の半分も発揮できないものなんですわ」

「今回はひどい、赤点だ」

「はい」

そして、空笑いを漏らすと、赤城は能力を使用した。

—敵が空間を創造したというのなら、俺にも解けるはずだ!!

それは一瞬の出来事だった。まばたき一つの後に映るのは真つ暗な世界。いや、ちらつく街灯に仄かな月明かり。ここは紛れもない、現実。事件が起きた場所であり、現在も事件が起きている場所だ。彼の前で遊幽が呆然とした姿で地面に座り込んでいた。

「遊幽ちゃん!!」

「し、周ちゃん!?それに、ハンス・ブリーゲルさん!?どうして!？」

彼女に答えることもなく、赤城は遊幽へと詰め寄った。

「もう一人はどこにいる!？」

「たつた今、消えたわ。五十メートル以上、ううん、もっと離れている」

「そうか、もう少し範囲を広げるべきだったね」

「その分、時間がかかるわ」

ひとまず敵は退散、任務は失敗してしまったということだ。赤城は倒れこんだ被害者たちの状態を確認し、改めて外傷はない事を確かめた。

「etcに関する文書」

安否を確認する赤城の背後で、静かに男が口を開いた。

「私もその噂は聞いている。魔法の全てを記した本。私も君と同じように任務でここにきた。アンダーソン・カイルは頼りにならないのでね、私が君のサポート役ということだ」
「つまりずっと見ていたわけですね」

「ああ」

「なら、もつと早く助けてもらいたかったです」

拗ねるように頬を膨らませる赤城に、ハンスは淡々と返す。

「君がどう対処するかを確かめたかった。まあ残念な結果に終わったが」

「むう……」

罰の悪そうな顔をする赤城を横目に、ハンスは都市の方を見返した。

「ここは襲撃を受けるにも襲撃をするにもいい場所だな」

いつもの癖でコートから煙草を取り出した彼は、躊躇うように再びそれを戻した。どうやら禁煙を心がけているらしい。

「ところで、アンダーソン・カイルはどこにいる。君たちと一緒にではなかったのか」

「いえ、もしかしたらまだ協会内に……」

「電話してくれ」

やや苛立たしげな顔で促すハンスに赤城も訝しげに目を細める。事実、彼の胸にも何か嫌な感じがしていた。

—もしかしたら、別の所で事件に巻き込まれているかもしれない。

僅かな不安を抱え、赤城は携帯を取り出す。数回のコールの後、アンダーソンは電話に出た。

『「もしもし」』

『「もしもし!? アンダーソン!?!」』

『「おお、周か。どうだ無事に仕事は終わったか」』

『「いや、それよりアンダーソン!! 今どこにいるんだ!!」』

『「ん? 俺か? 俺は……二十分前にデートを終えて家に帰る途中だが」』

『「……は?」』

『「それがどうした? 何か用か?」』

『「いやいい。もう切る」』

『「おいおい、どうしたんだよ。周!!」』

「プツッ」

何事もなかったかのように赤城は携帯をしまった。

「無事でよかったな」

「全くですね、こっちは死に物狂いで戦っていたのに呑気にデートしてるとは思いませんでした」

「……とにかく彼にも危険が迫っているのは間違いない。当分は一緒に行動した方が安全

だ」

「そうですね。ところで、被害者たちはどうなるんですか」

ハンスは彼らを一瞥すると、赤城の問いに淡々と答えた。

「彼らは協会が面倒を見てくれる。幸い、早期に治療ができる。命に別条はないだろう」
「よかった」

安堵の息を漏らす赤城に、今度はハンスが問いかけた。

「空間の能力は今のところ君が最も詳しいはずだ。全盛期に比べて劣っているとはいえ、専門家として彼らの状態をどう見る？」

しばらくの沈黙の後。じつと前を見据えたまま、赤城は答えた。

「関連はなさそうです」

「ほう」

「以前のように空間を切断した能力、【体分け】の能力だと仮定した場合、きつとその空間を維持することはできません」

赤城の見解にハンスは一人、その能力を思い返す。

「【体分け】。空間能力を持つ者が使う能力。体と体の間の空間、存在を分ける。つまり当人に自身の身体部位の認識を失くすということ。【元々それは存在していなかった】と。しかし今回の事件は認識を失くすのではなく、確かにそれは身体についており、存在していたという認識もあった。ということは一、

「やはり催眠か」

「そのようですね」

「なるほど」

会話を終えると、ハンスは協会の方に足を向けた。

「これから忙しくなる。二人ともついて来なさい」

「え、彼らは放置しといていいんですか!？」

「もう少ししたら協会員が来る」

そう言い残し、ハンスは振り返ることなく足を進める。仕方なく、赤城と遊幽も彼の背中について行くことにした。

※

「そういえば、周ちゃん。体大丈夫？」

ハンスの後を遅れるようにして行く中、唐突に遊幽が赤城の顔色を窺った。

「うーん、平気かって言われたら平気じゃないかな。久しぶりに戦闘なんてしたから勘が鈍ってみたいだ。昔みたいにはいかないね」

「大丈夫、私がいるじゃない。足りないところはサポートする」

「……そうだね」

隣から涼しげな笑みを貰う赤城。釣られて彼もいつもの笑顔を取り戻した。自分にはこのような憂鬱そうな表情は似合わない。

「ありがとう、遊幽ちゃん」

「なっ……!!」

「ん？遊幽ちゃん？」

瞬間、まるで火傷をしたかのように顔を赤らめる少女に、何が起こったのか不思議そうに見つめる青年。そして、

「君たち、ちゃんと後ろをついてきなさい」

「ほ、ほら!!急がないと!!あの人、速足だからもうあんな先にまで行ってるじゃん!!」

「あ、ちよつ……遊幽ちゃん、引っ張らないで!!」

深夜に聞こえる男の掛け声。走る彼女に腕を取られ、赤城は協会の中へと入っていった。

「えつと……本当に申し訳なかった。彼女に呼ばれて。こんなことは初めてだったから……つい」

青年、赤城周は普段の頬笑みはどこに行っただのか、冷ややかな目でアンダーソン・カイルを見下ろしていた。彼がこのような態度を示すことはめったになく、おかげでアンダーソンの顔色は非常に悪い。

夜明けの執務室。部屋の様子は昼間と変わらず、ひどい散らかり様であった。床に落ちた書類を整理しながら、ハンス・ブリーゲルと天城遊幽は、何も言わずに彼らの対話に耳を傾けている。

「こつちが徹夜で働いている間にデートしているとは微塵も思わなかったよ」

「悪かった、次からはしつかりする」

「まあ……確かにあれだけの美人なら仕方ない事もないけど」

瞬間、殺気を感じた赤城はすぐに咳払いをして誤魔化した。

「とにかく。俺はどんな目にあつても構わない。けど、こつちには遊幽ちゃんがいる。もし危険な目にあつたら、どうするんだ」

問い詰めるような赤城の物言いに、アンダーソンは拳をきつく握りしめて俯いている。そんな彼を見て、赤城も失望したかのようにため息を零した。同僚たちの信頼も厚く、誰よりも誠実な人間だと思っていた彼が、今回このような行動をするとは思つてもいなかったからだ。

「俺がどうかしていた。本当にすまない」

「……もういいよ。謝つたところで何も変わらない。それより今後のことを話し合おう」

「ああ、そうだな」

すると、アンダーソンの目の色が変わつた。

「周、支部内の人間は何人やられたんだ」

「三人……俺のミスだ」

今度は赤城が顔を伏せる。揃つて申し訳なさそうな顔をする二人。

「俺がすっかりサポート役として仕事をしていたのなら。悔しげに唇を噛みしめたアンダーソンは、更に赤城に問いかける。

「襲撃を受けたその三人は本当に魔法使いだつたのか？」

「ああ」

赤城はアンダーソンに頷き返すと、後ろで控えていたハンスに振り返った。解説をお願いすると言う意味だろう。彼の意を汲んだハンスも、迷うことなく口を開いた。重厚で荒い声が室内に響き渡る。

「表向きは完全に擬装し、協会内部でさえ魔法使いとして知られていない連中だ」

「彼らの目的はなんですか」

アンダーソンの質問に、ハンスは逆に問いかけた。

「古文書を輸入し解読するために一番重要なことは何だと思う」

訝しげな表情の後、アンダーソンは何てことないように答える。

「それは、その古文書の言語を知ってることでは……あ」

「ああ、なるほど」

「そういうことか」

アンダーソンが気付くのと同時に、赤城と遊幽も納得の声を上げた。

「魔法使いの根本は言語学者だ。古文書を収集して解読するには、君のように外部から活動する人間も必要だが、このように擬装行為をして収集を行う人間も必要だということだ」

「どういうこと？別に正体なんて隠さなくてもいいんじゃない？」

首を傾げる遊幽を彼は視線だけを彼女に向ける。

「迂闊に多くの人の目に触れてはならない内容があるからだ。彼らはそれを選別している」
静かに答えるハンスに遊幽は思わず息を飲んだ。一方の赤城は表情を崩すことなく、じつくりと頭の中で考えを巡らせる。

「アンダーソン、etcの文書は協会内部にもないんじゃないのか？」

「ああ、それは噂に過ぎないはずの代物だ」

「ふむ……でもそれが本当に噂なら、何でそんなに必死なんだ？」

「さあな」

すると、今度は遊幽が何てことないような様子で意見を述べた。

「ねえ、もしかして襲撃を受けた人たちって、みんな協会内でその古文書を探すために擬装していた人達なんじゃないの？だから研究所もその人たちを襲って、何か情報を抜き出そうとしていたのかも」

「―都合がよすぎる」

彼女の意見に対し、赤城は無意識の内に呟いていた。

「安易に否定をするな。視野が狭くなるぞ。辻褄が合いすぎる方が、逆に真実の可能性もある。むしろ、複雑なものほど虚構の可能性もあるものだ」

「ブリーゲルさん」

赤城は気を取り直して、アンダーソンへと向き直った。

「そろそろ教えてくれ。協会の本当の依頼は何だ」

『「協会内の職員が襲撃を受けている。これを処理してほしい」』

「なるほど……でも、何か。何か変な感じが」

「変な感じ？」

首を傾げる赤城に、アンダーソンは訝しげな表情を返す。

「いや、何でもない。それより、また襲撃が起こる確率は？」

「ないとは言えない。今回のように、擬装した魔法使いがまだいる可能性もあるし、彼らがまた狙われるかもしれない」

「支部内の反応は？」

「そんなに大きな動揺はないよ。事件が起こった事すら知らない連中もいるからね」
「そうか」

やっとなりと張り詰めていた肩を落とし、赤城は椅子に背中を預けた。アンダーソンも腕組みを解き、強張っていた顔を戻す。

「そうだ、アンダーソン。今日も夜勤か？」

「ああ、今日は古文書関連の人間はみんな夜勤だ」

「でも次々と偽装した人たちが襲われてるのに、その人たちも夜勤するのかな？」
遊幽の純粹な疑問に、赤城は穏やかな笑みを向けた。

「突然夜勤しなくなったら、それこそ自分は擬装している魔法使いですって周囲にバラすようなものだよ」

「む……確かに」

そして再び彼女が何かを言う前に、赤城は告げる。

「俺は今日も潜入捜査するけど、遊幽ちゃんはここで大人しくしていてね。何が起こるかわからないし」

「やだ、私も手伝う」

「駄目」

「何だよ!!」

「遊幽ちゃんが心配なんだよ。頼むから、ここでじっとしてて」

いつものように赤城は微笑む。が、その笑顔は「大人しくしている」と言ってるようにも見えない。そんな彼の顔を見ると、つい彼女も自分が情けなく思えてきた。

「……わかった。その代わり何かあったら、すぐに連絡して。ううん、もし遅かったら勝手に外に飛び出していくから」

「うん。ありがとう、遊幽ちゃん」

素直に感謝まで述べられ、彼女は気恥かしげにそっぽを向いた。

「……早く戻って来てね」

「もちろん。仕事が終わったらすぐに帰るよ」

彼の言葉を聞き終えると、遊幽は近くのソファアに座った。

「ホテルにはいつ戻れるの？」

「事件がおわったらかな」

「……いつ終わるの」

「いつか終わるよ」

「……せつかくお金払っているのに、勿体ないね。こんな汚い部屋で寝泊まりしなきゃいけないなんて」

彼女の言葉に、思わずアンダーソンは不満気な顔をするが、何も言わないあたり彼も重々自覚はあるのだろう。

「あー、疲れた」

早速遊幽はソファアの上で寛ぎ始めた。そんな彼女に構うことなく、赤城はアンダーソン

へと向き直る。

「そういえば。彼女は一体、何て言ってお前を呼びだしたんだ？」

不意打ちだったのか、アンダーソンの顔はみるみる真っ赤に染まっていった。そして普段の彼の声量からは考えられないほど、もごもごとした声で話します。

「い、いや、その。ただ、俺の顔が……見たいって言うから。会話を、したくなっただって」
「そうか、本当にルイスさんと上手くいってるんだな」

初めて見る友人の初々しい表情に、赤城も自然と笑みを零していた。アンダーソンも恥かしげに頬を掻く。

—ルイス？

ただ一人、ハンス・ブリーゲルだけが妙な違和感を胸に抱きながら。

「それで、俺は今日何をすればいいんだ？」

「いつも通りでいいよ。退勤する時間になったら帰ってもいいし。昨日は何も状況がわからなかったからお前の助けが必要だったけど、今日はブリーゲルさんもいるし大丈夫だ」

「つまり俺は何もしなくていいのか？」

困惑した顔を浮かべるアンダーソンに、赤城は意地の悪そうな顔で彼の胸をつつく。

「今日も彼女から連絡が来るんじゃないのか？」

「な、何で知ってるんだ!？」

「ただの勘だよ。ちゃんとエスコートしてやれよ？」

「お……おう」

友人に激励の言葉を告げると、赤城はソファで寝息を立てている遊幽へと顔を向けた。その姿がどこか滑稽で、彼は人知れず目を細める。

「結局。どこだろうと気持ち良さそうに眠るなあ、遊幽ちゃんは」

アンダーソンは鼻歌を歌いながら、夜道に行く。自身が好意を寄せている女性、ルイス・マクドゥーガルから電話が来たからだ。初めの頃は、まさしく高嶺の花。とても遠い存在だと思っていたが、近頃は彼女から誘いを貰える程親しい仲になっていた。

しかし、昨晩は思わぬ失態をしてしまった。いくら彼女が愛しくても、今後あのような行動は慎まなければいけない。今夜も出かけるかは躊躇ったが、大切な友人の激励を思い出し、アンダーソンは彼女に会うことにした。必死で働いている彼に報いる方法。それはルイスの心を手に入れることである。そう信じて、彼は夜の街へと繰り出した。

シヨールウインドウに映る自身の姿を確認すると、彼は馴染みの店の扉に手をかけた。以前はPUBだったこの場所、今はBARだ。同じ店のはずなのに、雰囲気がるで違うように彼は感じている。

時刻は午後七時半過ぎ。いつもなら小生意気な表情で彼を眺めていた店主も今日は違った。「何か良い事でもあるみたいだな」

随分と久しぶりに彼はアンダーソンへと声をかけた。

「今更何を。全部お見通しだろ」

軽い会話の後、アンダーソンはいつもの席に向かった。

「こんばんは」

「え……」

驚いたことに、アンダーソンより先に彼女が来ていた。

「あれ……もしかして私、時間間違えました？」

思わず彼は腕時計を確認する。予定よりだいぶ早めに家を出たはずだった。

「大丈夫ですよ、アンダーソンさん。私が早く来てたくて来てしまっただけです」

上品そうな笑みを浮かべるルイスに対し、アンダーソンは気恥ずかしそうに顔をそむける。

「ご友人のお二人はもう来ないんですか？」

「あ、はい。今日も夜勤で」

「夜勤……大変そうですね」

「はい」

「乾杯しましょう。マンハッタン、もう出てますよ」

彼女に言われて、アンダーソンはカウンターを見る。すると、そこには頼んだ覚えのないマンハッタンが置いてあった。驚いた顔で店主を見つめるアンダーソンだったが、店主は彼に目をくれることなく黙々と作業を続ける。

「アンダーソンさん？」

「は、はい。乾杯しましょう」

そして彼らは揃ってグラスを傾けた。

一通り酒を酌み交わした後、二人は外に出かけることにした。映画に書店にCDショップ。まるでデートそのものの様な気分をアンダーソンは味わっていた。数ヶ月前の彼には想像もできない程、とても幸せな時間だ。

「あの!!」

「はい？」

ふと、アンダーソンは無意識の内に彼女を呼びとめていた。依然として、にっこりと笑いながら振り返る彼女。その顔を直視することすら出来ないほど、彼の心臓は脈打っていた。

「ど、どうして。俺みたいな人といってくれるんですか？」

「俺みたいな人？」

ルイスは彼の言いたい事が上手く理解できないようで、小さく首を傾げる。

「いや、だから……ルイスさん、あなたは完璧な方です。外見も中身もすばらしい。だから、そんなあなたが何で俺なんかと」

アンダーソンが勢い余って顔を上げると、彼女の顔は彼が思っていたよりも近くにあった。そして彼女は静かに口を開く。

「以前、一人だった時がありました。六か月前のことです。本当に私は一人だった。そして、偶々通りかかったお店で飲んでいたら、声をかけてくれたのがあなた、アンダーソ

ンさんだったんです。大したことない理由です。でも、人はそんな小さな出来事でも惹かれるものなのです」

彼女は自身の手を胸の前で握り、そつと目を閉じたまま続けた。

「やつぱり、こんな理由じゃ納得いきませんかね」

寂しげに微笑む彼女に見惚れていたアンダーソンは、はつと我に返った。

「い、いえ!! 充分です!!」

すると、彼女の笑顔がぱつと明るなものへと変わる。

「この縁、続くといいですね」

「はい!! あの、俺も同じです!!」

しかし、彼の鼓動はまだ収まらない。いや、徐々に速まっている。何故なら、彼にとっての大勝負はこれからだからだ。今日、いい雰囲気になれたのなら、彼はルイスにプロポーズをするつもりでいた。そして今こそが絶好のチャンスである。

「ミ……ミス・ルイス!!」

「はい」

「あの、私はあなたを……!!」

彼女もアンダーソンの瞳を真つすぐ見つめていた。まるでこの後続く言葉を分かっているかのように。

—ポソツツ!!

—ポソツツ!!

瞬間、遠くの空で黄色い信号弾が二発上がった。

―敵が現れたのか!!!

しかし、彼は動く事ができなかった。自身がどのようにに行動すればいいのか、わからないのだ。今ここで人生最大のチャンス逃していいのか。頭に血が上って、破裂しそうな気さえもしていた。

―俺はどうすれば!!

ふと、アンダーソンの脳内に彼の顔が浮かんだ。

彼は―、大切な友人はいつもの笑顔で笑っていたのだ。

「ミス・ルイス」

「はい」

アンダーソンはルイスの肩に触れ、真剣な瞳で彼女を見据える。

「私は行かなければいけない、急用ができてしまいました」

「え?」

「先に帰っててください!!後で必ず連絡します!!」

そして彼女の返事を待たずに、アンダーソンは走り出す。組織のために、いやそれ以上に

大切な友人のために。

人々の往来も減り、街が暗闇に包まれる頃。

赤城は襲いかかる敵の攻撃を素早く避けた。相手は昨晚と同じ、黒い影だ。

「ブリーゲルさん、これどうしたらいいんですか？」

「ふむ。そうだな、どうしようか」

言葉とは裏腹に、ハンスの中ではもう答えが出ているようだった。彼は敵の攻撃を避ける
と、その勢いを殺すことなく影の懐へと蹴りを入れた。

「まず触れる事ができるといふことから、あれは物体。つまり倒すことは可能だ」

言い終わるや否や、彼はナイフを投げた。影はそれを容易く避け、ハンスに向かって拳を
振り上げる。

「そして戦闘パターンは単純」

瞬間、影の動きが止まった。見ると、ハンスが投げたナイフは地面に突き刺さり、青い光
を帯びていた。

「周君、職員たちは避難したか？」

「はい、大丈夫です。あらかじめ潜伏していた甲斐がありました」

今から三時間前。赤城とハンスは、昨晚のような屋上ではなく協会近くの裏通りで網を張

っていた。少しでも早く現場に向かえるようにするためだ。もちろんただ待ち構えるだけでなく、ハンスも策を巡らす。なるべく目立たないよう工夫した紙をいくつも地面に張り付けておいた。そして赤城の空間内で二人は外の様子を窺い、戦闘の時を待っていたのだ。

ハンスの魔法が切れ、影が動き出す。赤城は信号弾が上がった方を見上げ、拳銃を構えた。ハンスが相對している影とは別に、もう一つの影がそれを放ったに違いない。そう考えた彼は、じつと暗闇を見つめる。

「むやみに撃つな、周君。昨晚、経験したばかりだろう」

「でも、じゃあどうすればいいんですか!!」

「ひとまずあれば物体―人型に違いない。触れた時に骨と筋肉の感触があつた。ならば当然、関節も存在しているはずだ」

「つまり、どうすればいいんですか!!」

「簡単だ。要するに行動不能にすればいい。私が合図を送る、そしたら君は奴の左足を撃て。私に当たるかもしれないなどという心配はしなくていい」

言い終わると同時に、ハンスは勢いよく前に出た。そして敵の前で素早く姿勢を落とした彼は、そのまま地面に数枚の紙を張り付ける。次の瞬間、ハンスは見事な足さばきで体を反転させると、自身の拳を影のおよそ顎と思われる部分に向けて精いっぱい振り上げた。ハンスの予想通り、またしても彼の拳には人の顎を殴った時と同じような感触が残る。

「影のように見えるが、やはりこれはただの人間。だが、

ハンスの拳を真正面から受け取った敵は、しかし、苦しむ素振りを一切見せることなく彼に襲いかかる。一発、二発……続けざまに拳を振るう影だったが、持ち前の瞬発力でハンスはそれを易々と躲す。

瞬間、彼を追うような形で拳を振るっていた影の手が止まった。地面に貼っておいた紙が青く光り出す。

「今だ!!」

ハンスは、視線だけを赤城に向けた。そして、一発の銃声が路地に鳴り響く。弾は見事に影の左足を撃ちぬいていた。おかげで影の硬直時間が数秒は長くなるだろう。その間に態勢を立て直していたハンスが、影の肩に向けて重たい蹴りを入れた。そう、彼が狙っているのは骨折、もしくは脱臼させることである。

一度身を引いたハンスはナイフを手にすると、再び影に向かって突進した。足から肩、そして腕。いずれも骨に達するほどの深さに刃を入れていく。

「すごい……」

拳銃を手にしたまま、赤城は彼の手際の良さに思わず見惚れていた。もはや立つこともできず、ただ体を震わすだけの影を背にハンスは赤城の方へと振り返る。

「改造人間の中でも特異な存在だったな。以前の方がまだ感情を備えていて人間らしかったが、これはもうガラクタと同じだ」

「三年前の事件以降、研究所も金銭的な余裕がないのでは？」

ハンスの呟きを冗談気味に返す赤城だったが、彼は真剣な顔で首を縦に振った。

「確かにそうかもしれないな。奴らも大きな痛手を食らったはずだ」

「は……はあ」

ゆつくり会話をすることができるといふことは、戦闘はもう終わったのだろうか。そう思った赤城は、安堵の息をついて大きく体を伸ばした。

「油断するな、周君」

「あ、はい!!」

ハンスの鋭い視線を受け、思わず背筋を伸ばす赤城。そして――

「そろそろ来るぞ」

ハンスは目の前の暗闇をじっと見据える。月にかかっていた雲が消え、先ほどよりも明快な視界が広がった。

「不気味ですね」

「ああ」

先ほどの影は薄暗い中で蠢く黒い物体だったが、今、彼らの目の前には月明かりの下に蠢く黒い塊――まさしく「影そのもの」がいた。

腰を下げ、再び戦闘態勢に入るハンスだったが、ふと影の後ろから徐々に彼らへと近づく人間が現れた。

「こんばんは」

突然聞こえた生身の人間の声に、思わず赤城は身を強張らせる。一方のハンスは驚く素振りを微塵も見せず、まっすぐと男を見つめていた。

「いやいや、まさかハンス・ブリーゲルなどという大物を前に出してくるとは。我々もつい

遊びすぎたかな」

「その声は……ロベルトだな」

「お久しぶりです。まさか私の名前を覚えていてくれるなんて思わなかったよ、光栄だね」
親しげな口調で語る男。月明かりに照らされたその顔は一見、物静かな男性に見えた。知的な眼鏡を掛けた学者のような彼、しかし、その目つきは狂気を宿しているかのように尋常ではなかった。

「今回の件は全て貴様が仕出かしたとか」

「いや、計画自体は私が立てたものではない。私は指示されただけだ。あの事件以降、急進派の勢いもなくなつて私も大人しく過ごしていたんだが、奴が突然面白そうな話を持ってきてね。調べてみると、古文書を研究する奴らに魔法使いが紛れ込んでたから、ちよつと尋ねて回つていただけさ」

楽しそうに語り出す男を睨んだまま、ハンスは静かに口を開く。

「記録によると貴様が研究していた分野は一種の生理学。この【影】は君の作品というところか」

「ああ、そうだ。これは全部私の複製品、全て私を元に行っているんだ。感情も思考も一切抜き取った、まさしく私の【影】だ」

「なるほど」

眩きと共にハンスは懐から拳銃を取り出し、迷うことなく男に向けて引き金を引いた。消音機をつけている彼の拳銃は静かに銃弾を放つ―が、それは男の前に立ちふさがった影の身体に吸い込まれていった。

「まだ私の話は終わっていないよ。大人しく聞いてくれ。私のような一般人はそんな鉛玉を食らったらタダじゃ済まないんだ」

困ったように笑う男に対し、ハンスはしぶしぶ拳銃を構えていた手を降ろし、まるで確認をするかのような口ぶりで話し始めた。

「被害者の特徴は自身の身体部位を認知することができないというもの。だが空間概念の専門家とも言える赤城周の見解は、それは催眠によるものだという。人の五感までも支配する催眠を研究していた奴は私の記憶には二人しかいない。その内、片方は死亡が確認されている。ということ、未だ姿を見せていない奴が黒幕で間違いない」

「大正解だ、ハンス!! そう、今回の黒幕はケラーだよ。少々面倒くさかったが、他人の頭の中から必要な情報を抜き取り、逆催眠をかけて五感に異常を与える。これを私の影に入力しておいたのさ。まあパリに来たのは、ほんの気まぐれだけだね。これまでに重要な情報が全く見つからなかったから、終わりにしてもいいと思っていたけど、最後の最後までさかこんな素敵な出会いが待っているとは思わなかったよ」

一人、満足気に頷く男に対し、ハンスはただ彼を見据えるだけだった。そんな彼を横目に赤城は一歩前に踏み出す。

「一つ聞きたいんですけど、どうやって欧州支部の職員たちの中にいる一般人と魔法使いを見分けたんですか？」

男はじつと赤城の顔を見つめた後、人が変わったかのように下品な笑みを零した。

「さあな。知りたければ、自分で調べろんだ」

まともに取り合わない男を前に不満げに眉を潜める赤城。ふと、何かが彼の頬に触れた。

「雨だ」

突然降り出した雨は、ぽつぽつと夜中の路地を濡らし、雨粒は徐々に水たまりを作っている。

「周君、やるべきことはわかっているな」

「……はい」

ハンスは後ろを振り向くことなく、仲間の覚悟を受け入れた。

「落ち着いて、奴の頭に照準を合わせるんだ。あれは人間ではないと思え」

「………はい」

赤城はゆっくりと拳銃を構える。

狙うは男の頭。この引き金を引けば、相手は死ぬ。

震える手元を必死に抑え、彼は引き金に手を添える。

数センチ動かせば、男の命はあつけなく終わるのだ。それは、言葉で示すだけなら非常に簡単な作業だ。子供にだって可能な動きだ。

何も考えなければ――

「……すみません。やっぱり俺には」

赤城は静かに腕を降ろした。

「そうか、ならば仕方ない」

ハンスは彼を責めることなく敵を前にして、戦闘態勢に入った。

「周君、では協会内で空間を作り、避難した彼らを守っていてくれ」

「……わかりました」

悔しそうに顔を伏せると、すぐに赤城は建物に向かって移動を開始した。その背を何もせずに見送る男。

「行かせてよかったのか？」

「ああ、せつかく君がくれたハンデだ。大人しく受け取っておこうと思つてね」

瞬間、男が前に出た。ハンス程の腕前ではない拳。難なく躲した彼は、その左腕を掴み関節を外そうとしたが、

「いや、捉えたのは私だ」

物凄い速さで影が迫ってくることに気付いた彼は咄嗟にその腕を離す。

「ぐっ」

ほんのわずか、反応に遅れたハンスは影の蹴りを食らい、勢いよく後方へ飛ばされてしまった。

「二対一、本当にこれでいいのかい？」

「……ああ、構わない」

思わず膝をついてしまったハンスは、ゆっくりと起き上がり態勢を直した。

「たまには私も本気で戦いたいんでね」

ハンスはナイフを手に右手を振り上げる。それが地面に刺さり、効果が発動されると同時に彼は物凄い速さで相手に詰め寄った。男も地面の紙に注意しながら、彼の攻撃を躲して

いく。

今回ハンスは単調な戦法、同じような攻撃を繰り返し続ける戦術にしたようであり、男もそれを早い段階で見抜いていた。そして、躲し切れないと判断した時点で影を挟んでいく。二対一ならではの戦法である。

「君の攻撃は一对一なら脅威的だが、自身より相手の数の方が多き時は容赦なく窮地に追い込まれてしまうんだよ」

「ブリーゲルさん!!」

ふと、協会内から戦闘を見守っていた赤城が飛び出してきた。彼は男の後を追う影に向かって、数発の弾丸を撃ち込んだ。援護ならできると思ったようである。

実際ほんの僅か、影の動きは鈍くなった。しかし、もはや男は影の力には頼っていない。彼はハンスの動きを見抜くのに精一杯で影に指示を出していなかったのだ。

そして男の管理下から離れた影は、一直線に自身へ殺意を向ける敵、赤城に向かって突進を開始する。

「……しまった!!」

咄嗟に受け身の姿勢を取ろうとした赤城だったが、

「そこまでだ!!」

響き渡る野太い声。同時に四方にばら撒かれた紙が反応して、魔法が発動する。男と影の動きが止まった。

「右に避ける!!」

指示通りに体を動かした、赤城はふと、声の方に顔を向ける。そこには、彼の友人がいた。

「アンダーソン!! いや、どうしてここに!!」

「親友が必死に戦っているのに、デートばかりしていられないだろう」
驚く赤城に満面の笑みを返すと、彼はハンスへと声をかけた。

「Mr.ブリーゲル。影は私が引き受けます。こちらは任せてください」

それを聞いたハンスは、やれやれと重苦しいコートを脱いで大きく肩を回した。

「個人的にはこのコートを気に入っているのだが……このままだと汚れてしまうな」
ハンスは赤城にコートを手渡すと、再び男と向き合った。

「うおおおお!!」

一方、大きな掛け声と共に、アンダーソンは影に向かって突進した。そしてすれ違いざまに『Boom』と書かれた紙をいくつか張り付ける。しばらくすると、それは爆発し、影からは煙が立ち上った。

しかし、影は怯むことなくアンダーソンに向かってくる。対して彼は『Stop』と書かれた紙を目の前の地面に張り付けた。案の定、それは彼の前で動きを止める。アンダーソンの得意な魔法、それは短時間で即効性のある魔法だ。

「非常識には、非常識をぶつけるだ!!」

彼は先ほどから同じ戦術で影と相対していた。いくら影、改造人間と言っても終わりはある。事実、影の動きは徐々に鈍くなっていた。

そしてアンダーソンは懐から拳銃を取り出し、影の足に照準を合わせる。更に動きを遅くするためだ。

ふと、ハンスと向き合っていた男は構えを解いて状況を確認した。

「ふむ、これで三対二になったのか。逆転されてしまったかな」
困った、困ったと残念そうな顔を浮かべる男。

「研究所も終わりだ!! あんたもすぐに捕まえてやるよ!!」
アンダーソンの挑発に男は一層、顔をゆがめ、そして―、

「余所見は駄目だよ?」

一発の銃声。同時に、アンダーソンは膝から崩れ落ちた。

「っ……!!」

「アンダーソン!!」

急いで銃弾が飛んできた方向に銃口を向ける赤城。既に人影は小さくなっていた。

「くそっ……もう一人いたのか!!」

銃声に気を取られていたハンスも、再び目の前の敵へと視線を戻した。どうやら男にはもう戦闘の意志はなく、構えを解いたまま静かに彼に向き直っていた。

「君には話しておこうか。欧州大陸内には『さ』に関する文書はない。これが私の下した結論だ。第一、協会が何故そんなものを必死になつて探しているのかは知らないが、それを利用してそんな人間は思い浮かぶね。一人……いや、三人かな」

ハンスの返事も待たず、男は身を翻した。

「どこに行く」

「今日は終わりだ、ハンス。彼を早く病院に連れて行ってあげた方が良いよ」
ちらりと、アンダーソンへ視線を向けるハンス。次の瞬間、男の身体は闇の中に消えかかっていた。

「やれやれ、今回は君たちも私も利用されたようだ。お互い様だね」

雨音に紛れることなく、けらけらと耳障りな笑い声が響く真夜中。ハンスはきつく拳を握りしめて、奴が消えた暗闇をじつと睨んでいた。

「おい、アンダーソン!!」

赤城の声に、はっとハンスは我に返る。

「だ、大丈夫だ、周。そんなに深手じゃない……ははっ、つい油断しちゃったな」

言葉とは正反対に荒い呼吸を繰り返すアンダーソン。ハンスは急いで彼に駆け寄ると、赤城に手渡したコートを彼の身体に被せた。

「雨がひどい。早く建物の中に入るんだ。協会内に医者もいたはずだ」

「はい!!行くぞ、アンダーソン!!」

いつもより荒々しく声を掛けると、赤城はハンスと二人がかりで彼を背負い、協会の中へと入っていった。

この事件は一体何だったのだろうか。

窓から見える夕日を眺めながら、彼は思った。全てが未解決のまま、親友が傷付き、終わった事件。一つだけ確かな事は、敵はもう襲撃をしないということだけだ。

寝起きの瞼を擦りながら、赤城は部屋の鏡を見る。そこには疲労が溜まった自身の顔が映っていた。事件の後、日中ずっと横にはなっていたが上手く寝つけず、疲れが抜けていな

いようだ。

「よう!! 元気が、周!!」

勢いよく背中を叩かれた彼は、思わず前のめりに倒れそうになった。

「アンダーソン……もう平気なのか？」

「もちろん!! 俺はそんな柔な男じゃない。それに少しでも早く彼女に会いに行かねばならない!!」

昨晚の怪我から一日も経っていないが、彼の身体はすっかり良くなっていた。弾丸が急所を外れていたのもあるが、協会内の腕の良い医者がすぐに治療に取り掛かったおかげだろう。

アンダーソンはいつも通りの笑みを浮かべ、自身の事務室へと消えて行った。一方、ハンス・ブリーゲルは事件が収束した後、仕事が山ほど残っているといい、休む間もなくアメリカ大陸へと向かったようである。

「……何のためにフランスまで来たんだ」

赤城は虚脱感に囚われていた。

「とりあえず、ホテルに戻って休むか」

ホテルには遊幽が先に戻っていると彼は聞いていた。明日からの予定は白紙。今後のことは彼女と共に決めることにした。

アンダーソンは手術が終わると、真っ先に彼女の顔を思い浮かべた。肩に受けた弾丸の傷は深くなく、元々の体質もあるが協会の手配した医者のおかげで夕方には充分楽になっていた。

アンダーソンは懐から小さなケースを取り出す。中身は指輪。彼は今夜こそ、彼女にプロポーズをするつもりでいた。昨晩はあれから連絡がなかったが、きっと彼女ならば今晚もあの場所に顔を出すと思い、アンダーソンは馴染みの店へと向かった。

「ご機嫌ですね、いや、ワクワクして我慢できないという感じでしょうか」
店主は彼の顔がいつも以上に輝いていたのか、思わず軽口を叩く。

「今日こそ、決着をつけるんです」

「ああ、それは素敵な日だ」

「マンハッタンを一杯だけ頼む。アルコールを入れときたいんだ」
照れくさそうに笑うアンダーソンに、彼は静かにグラスを差し出した。

以前、一度だけ顔を出した店の前に赤城周は立っていた。まるで誰かを待っているかのよう。

「あ……」

「こんばんは」

驚いた顔で立ち尽くす女性―、ルイス・マクドゥーガル。赤城は丁寧に挨拶を交わした後、本題へと入った。

「今日のマンハッタンはいつもより美味しく感じるね」

「そうですか、それは良かったです」

沈黙。いや、店内に流れる音楽だけが彼らの間に満ちている。

「……遅いですね。普段ならもう来ている時間だが」

「そ、そうですね。まあ、たまには遅くなることもあるでしょう」

そう返すアンダーソンだが、彼の額には冷や汗が浮かんでいた。

先ほどの店から歩いて数分の喫茶店。若い男女は何も言わずに向かい合っていた。席に着いてから、どのくらい経っただろうか。やっと口を開いたのは赤城だった。

「ルイス・マクドゥーガル。あのバーで小切手にサインされた時、違和感を覚えたんです。

【Luise McDougall】、あれは【ルイス】じゃない。英国式で書くと、スペルもちがう。もちろん、最近はそのままで厳しくはないですが。サインをする時、自分も知らないうちに本名を書く癖を持っているんですよ」

彼女は何も言わずに赤城の言葉を待っていた。

「マクドゥーガル……偽名か本名かはわかりません。けど、研究所の「ルイーゼ」は殆どの人間が知っています。まさかそれがあなただとは、最初は気付きませんでしたけど」赤城はフランスを発つ前に言っていたハンスの言葉を思い出していた。

『「ルイス」という人間のスペルを思い出せ。私の推測が正しければ、彼女の本名は「ルイーゼ」だ』

すぐに答えは出た。

「どうしてアンダーソンを騙したんですか？彼なら簡単に騙せると思ってたんですか？」彼の質問に答えることなくルイス、いやルイーゼが顔を上げた。

「……私も研究所の一人としてOIGの文書を探す協力をしていました。彼から情報を聞いて、それを裏で流していたんです」

「だから職員の退勤時間ともある程度把握していたのか」

彼女は静かに頷く。そして、再び沈黙が彼らを包んだ。女の顔は静かな悲しみに溢れ、男の顔は静かな怒りで満ちている。

「あなたがアンダーソンに見せた優しさは全て嘘だったんですね」

問い詰めるような赤城の言葉に彼女はやつと重い口を開いた。

「彼には……アンダーソンさんには申し訳ないと思っています」

そして懐かしそうな目で彼女はテーブルの上のコップを見つめた。

「初めは研究所のために近づきました。でも、半年経った今は……。彼の優しさに、彼の笑顔に私は救われていた気がします。初めて嬉しいとか楽しいという感情を知ることがで

きた。研究所の人間である前に、私は一人の人間だと気づかされてしまったんです——だって、彼だけが一人だった私に声を掛けてくれたから」

一息ついた後、静かにそう告げた彼女の瞳は本当に幸せそうな色をしていた。

「昨晚」

しかし赤城はそんな彼女に目をくれることなく、淡々と話を続ける。

「アンダーソンが銃撃された箇所を確認しに行きました。普通、狙撃をする際は静かに近づき静かに立ち去る。行きと帰りの二つしか足跡はつかないはずなんです。けど、雨で濡れていたその場所には狙撃手が何度も行ったり来たりした跡が残っていた。おそらくその狙撃手は撃つかどうかを何度も迷っていたのでしよう。最終的にその人物は引き金を引いたようですが」

ちらりと彼女の様子を窺うと、赤城はそれ以上何も言うことはなかった。いや、彼女の顔を見てその続きを躊躇ったのだ。

「では、お先に失礼します。この件は私しか知らないのです、今後の事はあなたの判断に任せます。彼の友人の一人として、私はあなたにお願いします」

そう告げると、赤城は一度も振り返ることなく喫茶店を後にした。間延びした音楽が流れる店内に、ぽつりと落ちる女の涙を残して。

「おい、アンダーソンさん。そろそろやめといた方がいいんじゃないか？」

「え、俺そんなに飲んだか？」
店主と向き合う形で座る男。彼の顔色は赤みを帯びていた。
「あんまり酔いすぎない方が良いと思うぞ」
店主の忠告を受け、男も真面目な顔で頷く。
「そうだな、酔っ払いすぎたら逆に見つとも無いな」

青年が立ち去り、何曲目の音楽に切り替わった頃だろうか。女は物凄い勢いで外に出ると、大通りを無我夢中に走り抜けて行く。

「アンダーソンさん……アンダーソンさん!!」

彼女にとって、もつとも人間らしく生きることができた半年間。彼の声、言葉、笑顔が脳内を駆け巡る。そんな幸せな日々を思い出しながら、彼女は走る。

彼女は確信していた。彼はそこにいると。いつもの――あの店にいます。

「全く、困ったなあ」

突然、彼女の足が止まる。

目の前には見慣れた顔の男が立っていた。

「ロベルト」

「ケラーがルーゼー一人に任せ切れないとはこういう事だったのか」
男、ロベルトは面倒くさそうな顔で懐から拳銃を取り出した。

「すまないな、後始末は私の仕事なんだ」
無音。
銃声すら響くことなく、彼女は静かに倒れ伏した。あつという間に、その身体は徐々に真っ赤に濡れていく。

「主人、もう一杯くれ」

「それはいいが……財布の方は大丈夫か？」

「酒代くらい出せるに決まってるだろう!!」

完全な酔っ払い出せるに決まってるだろう!!」
昨日の今日、今夜彼女がここに訪れないということは、彼は振られてしまったということだ。店主も気を遣い、慰めの言葉を掛けるが彼は一切聞き入れない。

そしてアンダーソンが一人、カウンターで俯いていると、突然隣の席に誰かが腰を下ろした。

「やあ」

いつもの人懐っこい笑顔を向ける青年、赤城周だ。

「ああ……俺の人生は本当についていないな」

「そんなことないだろ、アンダーソン」

ヤケ酒から絡み酒に移ったアンダーソンは、大きなため息をついて俯いた。

「周……結局、振られてしまった。彼女はきつともうここに来ないだろう。昨晚の雰囲気
でいけると思っただが、やはり俺の様な男じゃ駄目だったんだ」

それが彼女の決めた答えか。そう思った赤城は、何も言わずに彼の肩を叩いた。

「慰めてくれるのか。なら、今夜は俺が潰れるまで付き合ってくれ」

「ああ」

彼女と交わすはずだった杯を親友と交わすアンダーソン。

「主人、あの曲をかけてもらえるか」

彼の提案に店主は黙って頷く。そして三十年以上前に流行った音楽が店内に流れ始めた。

これは彼の父親がよく好んで聞いていた曲。

Track. 4 「There Is A Light That Never Goes Out」 End. -